

187
322

古今集詳解
卷之二

085932-001-2

187-322

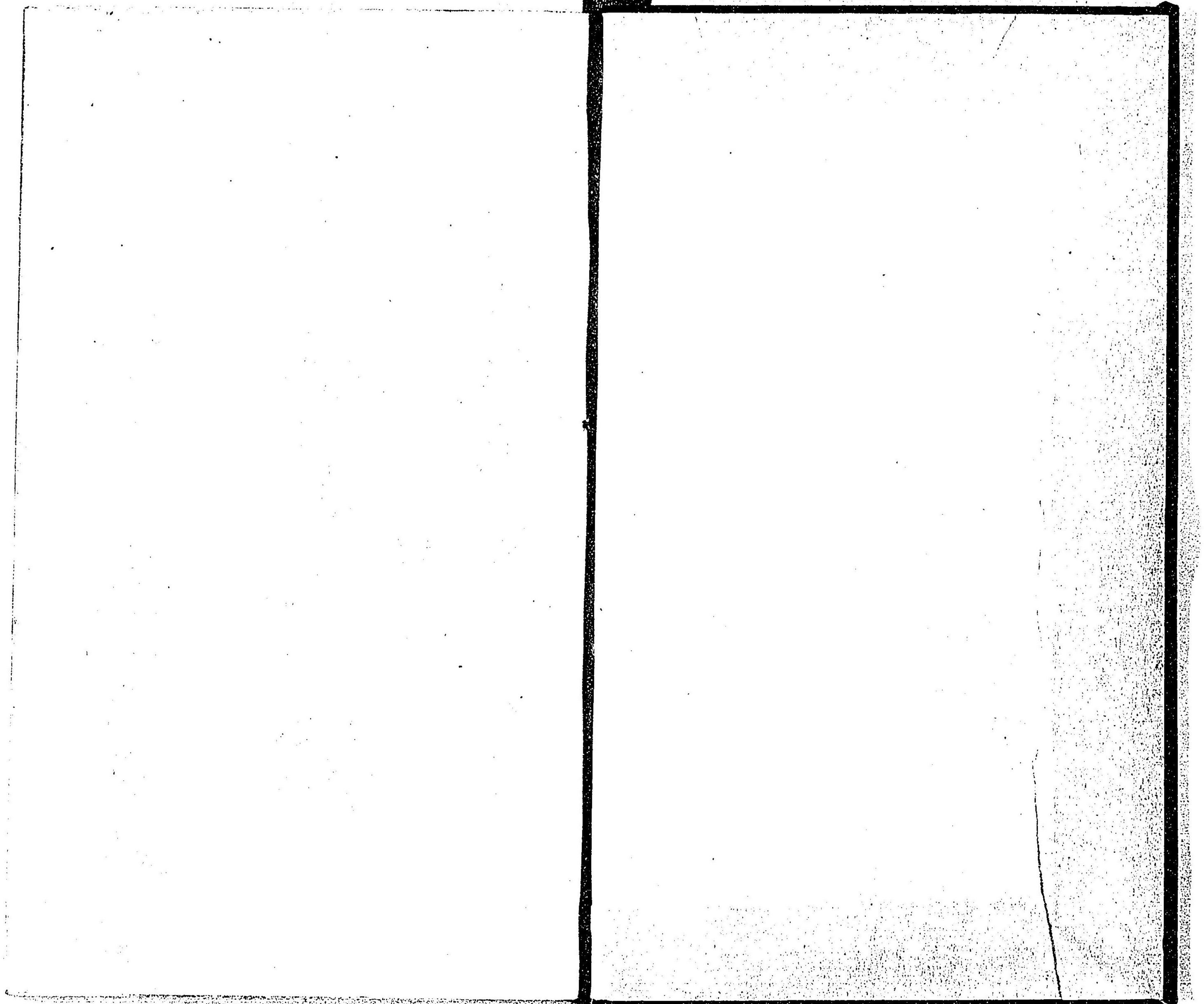
古今集詳解

中村秋香/述

M37-41

DBD-0529





187

322

中邨秋香著

卷の一



古今集詳解

東京

文榮閣藏版



提 要

古今集の歌は調高く、懸合せすぐれて、餘韻いひしらぬもの多きよしは古來いへることなれど、いかなる調を高しといへりや、いかなる懸合せがすぐれたりや、餘韻といへるは、いかなるところにありや、注釋の書ともはいと多かれど、これらの事は大かた示されず、しかも歌のおもての心と、餘韻より生ずるものとを、一つにして解かれしもの多ければ、やうく進みてや、歌のよしあしをもわきまへしるばかりに至れる者こそあれ、初學の輩は注釋によりても知り得べきにあらず、

さるに師の古今集を説き給ふを聞けば、これらの事は更にもいはず、大かた古來の注釋に、いまだ解き盡さざるふし少からぬ事をさへ、しみる、思ひしりぬ、さるはもとより吾佛たふとしの論

ならぬ事は、卷を開かば誰も忽ち思ひあるべく、例へば年の内の歌を年と歳との字義に本づきてあやなしたるものぞととかれ、袖ひちての歌を結びじとかゝり、解くとうけて、詞のかけ合せを興あらしめたりとのたまへるが如き、まことにさるべく、さらではえあるべからざるものにて、誰かはもどくものあらん、されども古人の説いまだこれに及ばざるをみて、明らかなるが如し、

さいつ頃より日を定めて講をこひ、備忘のためにうち聞のまにまに書つゞりおきつるが、やうやう積りて卷を重ねるに至れるを、これかれが見て、こはよの常の注釋の類ならで、初學が見てもいとよく解し得べく、あかもいとめでたきときあかしなるを、いかでその垣内にのみはひめおくべき、道のためにひろく世にこ

そなど、あながちにそののかせば、やがて師に乞ひて、更にこゝかして補ひ正し、かうすり卷とはなしつるなり、師のたまはく、古今集のあるやう、序は古來いふが如きこと、くしきものにはあらず、殊に歌に六種をいへるなどはとるにも足らぬ事なるよしは、先哲いづれもいひおかれぬ、要は歌は單純唯一の情、すなはちひとつ心よりよみいだすべきものにて、偽り飾るべきものならざること、を、詞をあやなしていはれしものにて、全躰の解釋は先哲の説すでに大かた盡しぬ、只かれこれを考へ合せて取るべきを取り、舍つべきを捨てんのみ、さて歌の解に至りては從來の諸説猶打かたぶかるゝもの少からず、學者深く意を用ふべきなりと、されば序の講義はむねと先哲の説によりて取舍せられ、まゝ師の見解をも加へ玉ひしなり、

世に行はるゝ注本のうち記されたる異本にて従ふべきもの、甲乙二書以上にのせられたるものは、直ちにそれを本文として講ぜられたれば、今もそれに従へり、その他は本文は猶前のまゝにて異本の字を傍に記したるを講ぜられ、取舍の事一々講義ありつれば其儘に記しぬ、

師常にのたまはく、おのれの得たる説あれば、口を極めて舊説を譏るは、學者の往々免れ難き事なれども、好ましからぬ事なり、其説果して正しくは、譏らずとも行はるべく、若又正しからざらんには、譏るともいかで行はれん、輿論は動かし難きものなればなり、況て其得たりとする説も、畢竟古人の深く考へ、詳に調べおかれたるに本づくものなるをや、但し我が説を明かにせんには、おのづから古人の説を辯ぜざるを得ざるものもあるべし、こは辯

ずるのみ、譏るにはあらず、とされれば講義中舊説を辯ぜらるゝものは、書名人名を告げられず、其従ふべきものに限りて之を示されたりき、

此講義はむねと歌のためにこひまゐらせしものなれば、歌にあつからぬ詞書は畧せられたるもあり、又よみ人の上などは講ぜられず、但し一わたり心得おくべき事は、歌にあづからざるをも示されしがあり、それらはやがて筆記しおきぬ、

筆記の體は打聽の儘に書つゞりしかど、速記法に依れるならねば、前後せる處も、略せる處も、時に或は文章語となれるところもあり、又「アリアマス」といひ、「思ヒマス」といふが如きは、大かた略して「ある」「おもふ」「又は」「ぢや」など記しぬ、

此書もと古今集明細講義と題せしを、書肆のあなかりに乞ふむ

ねあれば更に師の許を得てかくは改めしなり講義をたゞちに
解といはんことおだしくもおぼえねどいかゞはせん

明治三十六年十一月 門人 加藤きみ子

あるす



中邨秋香講述
加藤きみ子筆記

古今集は昔から歌の鑑と尊び重んじて歌を詠むには是
非とも一と通り讀まなくてはならぬものとし既に古く
は古今千遍歌萬首などいふ
何さま萬葉集は古過ぎて
よくない歌もある 後
ひ思はしからぬもの
かに詞づかひも穩か

古今集詳解

もわるい僻は先づは
今集を注解した書は
る物丈でも數十種には

に歓迎せられてをるは、契

聽 本居翁の遠鏡 景樹翁の正筆の類である これら

さる先生達の深く考へ、詳かに調べて説かれたるものなれ

と 儲歌といふものは妙なもので、尙いかゞと打傾かる

事ともがないとのみは申されぬ 老かし是等も畢竟諸先

生達が左様に、深く詳かに考へられ、調べおかれたからの事

で、新説の発見せられるといふも、原く所は諸先生の力に依

るものである 殊に此序文の如きは、普通本は誤も至て多

き事なるに 廣く異本に校訂せられて説きおかれた事故

我々は勞せずして、正しい説をも知る事が出来るといふは、
實に辱く喜ばしい限であり升

○儲これからが序であります。

やまとうたは、人のつ心をたねとして、よろづのことはとぞな
れりける。

やまとうたとは、日本歌といふ事で、和歌と書くと同じく、唐詩に對していふも
のである。これは當時漢學が重せられ、隨て唐詩が盛に行はれるから起つた
名稱で、貫之集、伊勢、空穂の物語をはじめ、此頃のものに彼是に見えて居
升、元來やまとは、五畿内なる大和國をいふ名稱であるが、大和國は代々、
天皇が都となされた場所なるに依りて、竟に日本の總名にも呼ぶ事と成つたの
である。儲このやまとうたと云ひ和歌といふに就ては、大に論がある事

支那で周詩や漢詩や 唐詩などいふは 彼國は世代に依て天子が改り随つて國號も變るからの事で それすら例へば唐の世で唐詩といふ事はなく、中が改つて後にいふ事である 故に支那人若くは英國人などで吾が國歌を誦する事ならばそれこそ和歌といひやまとうたとも云ふべき事なれども万世一系の天皇を戴く吾が國民として吾が國歌を稱してかやうに云ふは不都合であるといふので此論は賀茂翁が立てられたより殆ど國學者間の輿論となり 明治初年近藤芳樹翁が 陛下の御前で古今集を講じ奉りし時古今歌の集と唱へ此序文をも只うたは人の心をとよみて御講義申し 又現に今日宮中懷紙の書式なども従前は和歌と書きしを改めて歌とせしめられたる如きも畢竟此輿論に従はれた事と思はれ升 故に文字にも詞にも歌とのみいひもし二字ついでいふ時は國歌といひたい事であり升 ひとつ心は人の心と普通本にはあるがひとつ心とあるが宜しいひとつ心は單純惟一の情をいふ借一つとかかり萬とうけて詞をみやなしたである ことのはは詞といふに同じでそれを葉といふから種とかかりて葉とうけたである 借此一段は

四

冒頭第一番に歌は天真純一なる誠の情よりなるものといふ事を示されたのである
世の中にある人ことわざまげきものなれば心におもふことを、
見るものきく物につけていひいだせるなり。

世の中にある人は世上に存在せる人といふこと ことわざは事柄仕業といふこと人の世にある事柄や仕業がもとより多端なものであるから 随て見る物につけて聞くものにつけて 心に感じおもふ事が澤山にある それを其感に従つていひいだすが即ち歌であるといふので ことのはは上文をうけて萬のことのはとなるさまをいふのである。

花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまさりける。

上文よの中にある人云々をうけ 更に一步を進めて人のみならず鳥虫の類

然に遠ざかる事となる 定家卿の歌に「天地もあはれしるとはいにしへ」
がいつはりぞ敷島のみちといふ歌があるが、何さま定家卿の歌などは、已
自身みづから我は歌よみにはあらず、歌つくりぞ、といはれた位で、歌を巧みに
作り拵へた人である 作り拵へた歌がなんとして天地を感せしむること
出来ん 然るに自ら願みず、反つて古人の偽といふ、不都合の事といはなくて
はならぬ、

このうたあめつちのひらけはじまりける時よりいできにけり、

(あまのうきはしのまたにて、女神男神となり給へることをいへる歌なり)

これより歌のおこり始めをいふので 天地開闢の始伊弉諾伊弉册二神はじ
めて夫婦とならせられし時 男神あなにやしえをとめを唱へ玉ひ 女神
「あなにやしえをとめ」と和し玉ひたるをいふので 此歌なるもの苟且に出
来たものではない 實に天地開闢の時からして起つたものである、といふの
ちや さてこゝに古注がある、此古注は天曆以後の人の手に成つたものらし
いが 古代の事をよくも心得ぬ人の書いたものとみえて誤が多く、とるに足

らぬものなる事は、先達が追々辨せられてある 故に今すべて此古注をば取
ぬ事といたし、随てこれをば講せぬ事といたし、升 志かし古くより書添へ來
たものちやに依て、其文丈は注として、上下を圍んで存しておく事といたし、舛
志かあれども世につたはることは、ひさかたのあめにしては、志
たてるひめにはじまり、

(またてるひめとは、あめわかみこのめなり、せうとの神のかたちをか谷にうつり
てかゝやくをよめるえびすうたなるべし、)

左様ではあるけれども、口に言ひつき書にかき記して、歌として世に傳はるも
のは 天に在つては下照姫の詠に始まつたといふので、下照姫は、大名持の神
の御女で、天稚彦の妻である 其歌は天稚彦の兄神、味耜高彥根の神の形うつ
くしくして丘壑にかゝやくを見て、よみ玉ひしもので、天なるや、乙棚機のような
がせる玉のみすまるの穴玉や、眞谷ふたわたらす味耜高彥根といふ歌である。
「ひさかたのは天といふにかゝる枕詞 此枕詞といふは、ある詞の上におきて
調をなだらめととのへるもので、即ち山といふに「あし引の」とかぶらせ、神とい

ふに「ちはやぶるとおく類」のものをいふ。これらの辞のときあかしは賀茂翁の冠辯考に「はしくいうてある、尙ほ此枕詞についてはお話があるが、それは歌のところで申すことゝいたさう。」

あらがねのつちにしては、すさのをのみことよりぞおこりける。

又地にしては、須佐之男命の神詠より起つたことである、といふので、須佐之男命は天照大神の御弟神で、此神詠は、八雲たついつも八重垣妻こめに八重垣つくる其八重垣をの御歌をさしていふ。下照姫はもと地神なれど、天なるやの歌は天上にてよみましたるものなれば、天にしてはといひ、須佐之男命は天神なれど、八雲たつの神詠は此地にてよませ玉ひたるもの故に、地にしてはといふのである。さて「あらがねのはつち」といふにかゝる枕詞である。

ちはやぶる神代には歌のもじもさだまらず、すなほにしてことのころわきがたかりけらし。

上代には歌の字數なども、後世のやうに一定してをらず、人情が質直で詞づか

ひが簡古であるから、ふと見ては趣意が解しがたいやうに思はれる。拙梅であつたといふので、「ちはやぶる」は枕詞歌のもじは、詞數といふ程の事で、章の長短句の多少などをいふ。文字といふ詞に拘泥すべきでない、又わきがたかりけらしは、わざとぼやかしていふ詞で、疑つていふではない、わかりにくいやうにちよつと思はれる。拙梅ぢや、といふ位の詞である。上代の歌は實に詞數も定まらぬ事で、須佐之男命の御歌は、後世よりみれば、たまく三十一字に適する御歌ながら、上代のうちに有つては同じく詞數も定まらぬ内の御歌でありし事で、それをすべてかやうにいうたのである。

人の代となりて、すさのをのみことよりぞ、みそもじあまりひともしはよみける。

すさのをのみことはあまてるたほん神のこのかみなり、女とすみ給はむとていづもの國に宮づくりし玉ふ時に、そのとこにやいろの雪のたつを見てよみ給へるなり。

八雲たついつも八重垣つまこめに八重垣つくるその八重がきを

此文このぶん中ちゆうすさのをのみことよりの十字じゅうじは衍文えんぶんである、上文じゆうぶんすさのをのみことよ
りとありて、又こゝに重ねて此句このくあるべきでない、と遠鏡とんきやうや正義せいぎに見えたは、至
極ごくの説せつである、依よて今は之これに従したがふのである、さて人代じんたいとなりての後に三十一
字を以て一首しゆの體たいとしてよむ事こととはなつた事である、といふので、かの須佐
之男命ののおのみことの神詠しんえいは、三十一字の御歌みうたなれども、それは前にいふ通り、姑ははく上代詞數
の定ままらぬ歌うたの部分ぶぶんの中なかに入れて、こゝは専まら人代じんたいと成なつての短歌たんかについてい
ふのである。

かくてぞ花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれみ、露をかなしむこ
ころことばおほく、さまざまになりける。

「かくてぞは、人の世となりてを受けていふ事ことで、花をめで云々は、即ち冒頭はつとうに見
えてある、よの中なかにある人云々の意いで、花鳥霞露はなとりやすみつゆは時ときにつけて心に感ずる所ところさ
まぐなるをいふ、めでといひ、うらやみといひ、あはれみ、かなしむといふ皆みな
心に感ずること、さて心に感ずれば、聲こゑにあらはれて歌うたとなる故ゆゑ、其歌そのうた多くさ
まぐになつたといふのである。

遠き所もいでたつあしもとよりはじまりて、年月をわたり、たか
き山もふもとのちりひぢよりなりて、あま雲たなびくまでおひ
のぼれるごとくに、この歌もかくのごとくなるべし。

こゝは、上代歌じやうだいうたのおこりしより、此古今集このこゝんしゆを撰えらぶ比ひに至いたるまでの歌うたの發達はつたつをい
ふので、白樂天はくらくてん座右銘ざえみぎに、千里始足下、高山起微塵せんりしじつげ、こうざんきゑいじんとあるに本もとづく文ぶんぢやとい
ふ、ちりは塵芥ちりかで即ち埃ぼろをいひ、ひぢは泥土ひぢで塊かたまりの事こと、おひのぼりは、其塵そのちり
埃ぼろの積堆つみかたまりて山やまとなるをいふ、此歌このうたもかくの如ごとくなるべしは、上代じやうだいより今日けふま
での發達はつたつをたとへていふので、もとより既往きじやうについていふ事なれど、又自然將またしぜんしやう
來きたにもかけていふ意味いみもこもりて聞ゆ、こゝが文ぶんの妙處めうじよぢやといふ。

難波津のうたは、みかどのおほんはじめなり。

(天ささきのみかどのなにはづにてみこと聞えける時、東宮をたがひにゆづりて
くらゐにつき給はで三年になり、にければ王仁といふ人のいふかり思ひてよみ
てたてまつりける歌なり、この花は梅の花をいふなるべし。)

難波津のうたとは難波津に咲くや此花冬ごもり今は春べと咲くや此花といふ歌の事で、此歌は仁徳天皇へ王仁がよんで奉つたもの、「みかどの御はじめ」とは帝の御位をえろしめす御代の初にのみて奉りしもの、との意である。甚しく詞をはふいたやうなれど、誰もよく心得て居る事故次の淺香山云々の句に對してかくつゞけたのちや、儲この歌にいふこの花は梅の花といふ説は誤で、諸木の花をいふ。古代この花といふは木の花で、諸木の花をさやうに言うた事である。此歌については古來さまざま説あれど、天皇菟道稚郎子の皇太子と互に御位を譲りあひまし、三年の久しきを経て始めて御即位あらせられた事であるから、其また御位に即かせられなだ間の事を冬ごもりと申し、儲難波高津宮にて御即位ありしを難波津に咲くや此花と申したので、ふたたび咲くや此花と折かへしていふところが、御即位を重ね、悦びて申すさまが、言外に知られて面白いのである。

あさか山のことのは、うねべのたはふれよりよみて、

(かつらぎのたほきみをみちのおくへつかはしたりける時に國のつかさごとお

ろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさましかりければ、うねべなりける女のかはらけとりてよめるなり、これにぞたほきみの心とけにける。

あさか山のことのはとは、淺香山かけさへみゆる山の井の淺くは人を我が思はなくにといふ歌の事で、此歌は葛城王といふ人が朝廷の御用で陸奥國に出張した時、國司の接待方が不行届であつたが爲に、王は甚不快に思ひ御馳走など出でたれど、箸に手をも觸れなだを、其席に接待の爲に出て居た以前、委女を勤め、氣がさいて洒落た娘子が、其様子を見て取て、盃を手に取り、王の傍に進み、其膝を拍て、此歌をうたうたから、王の心忽ちに解終日、快く酒宴せられたといふ事、萬葉集第十六に見えてをる。淺香山は其近傍の山の名、山の井は、山より涌出る清水の一處に溜りて流れぬもの、井はもと居るの義で、流水に對していふ名、今も流れぬ水を居水といふといふ。さてさやうの井なる故に、影がうつるので、それをうけ、又淺香山のあさといふにか、くはといひ下したので、上の句は淺くはといはん爲に、近傍にあるといふので、之を序歌といふ。下の句は淺くおろそかに我が思

にてはあらずとの意「思はなくには思はぬにの意でには重く言
詞である 采女とは禁中采女司の女官で、主上の御膳部などを取扱
れは諸國の郡領などの娘の容色よき又は藝能あるものなどをさし上
で前采女は以前采女を勤めたものをいふ たはぶれば即興といふ程の事
れを何やかやとむづかしく説くは宜しくない。

此ふたうたは歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもし
ける。

難波津の歌は男のよみしもの故父にたとへ淺香山のは、女のよみしもの故母
にたとふ 此二首は世に聞えたるもの故、父母のやうなりといふ さて右の
如く世に知られた歌故に、往古は此二首を以て手習の始の手本となしたりし
故に、手習ふ人の云々といふのである いろは歌を手習の始に習はしたるは、
これよりはるかに後の事である。

そもく歌のさまむつなり、からのうたにもかくぞあるべき。

そもくとは上をうけて下を起す辞、それ故上にうける所の文がなくてはい
はれぬ辭じや 後の文に初めにそもくといふは誤である 偕この文は全
く詩の六義に依てかゝれたもので、歌にはもとよりかやうな區別がある事
でない、といふ事は先哲が已に追々いはれてある事ぢや、依てくはしくいふまで
の事でない 詩の六義といふは、風賦比興雅頌の六である さて實は詩の六
義に依てかゝれたものなれども、もとより歌に此六の別あるが如くかきな
て、からのうたにもかくぞあるべき、とよそくしく書なした事である かや
うにしひて六種の區別を立てたのは、當時漢學が盛に行はれて、何事によらず
漢學風でなければならぬやうの勢で有た故に、歌を解くにもかやうに詩の六
義に倣つたものである。

そのむくさのひとつにはそへうた、たほさゞきのみかどをそへ
奉れる歌

なにはづに咲やこの花冬こもりいまは春べとさくやこ

のはな

といへるなるべし

「おほさゝき云々」より、いへるなるべし迄は、古注より前なる古き注が本文にまぎれ入りしにて、本文は一つにはそへうた、二つにはかぞへうた、といふやうにありしならん、と先哲の説である、今は之に従ふ、さてそへ歌とは表には山水草木の類をよみて、裏には祝の意又は愁ひ哀しみ、若くは戀慕ふ情をそふるをいふ、然れども、後にあるなすらへ歌又はたとへ歌などとも、煎じつめてみると紛はしくなるは、畢竟強ひて設けたものであるからの事ぢや、故に此六種の區別はくはしく解くまでの必要はないことである、但しこゝに引いた歌は、ふるくより本文に紛入つたもので、且名高い歌ゆる歌の解次は大略御話し申さう、しかし難波津のうたはすでに前に申した故御話し申さぬ、

ふたつにはかぞへうた、

「咲花にたもひつく身のあぢきなき身にいたづきのいる

もしらずて

といへるなるべし

これはたゞことにいひて物にたとへなどもせぬものなり、此うたいかにいへるにかあらむそのこゝろえがたしいつゝにたゞこと歌といへるなむこれにはかなふべし、

かぞへ歌とは、すべて其事物をつぶさにかぞへたてるやうによむをいふ、咲花にの歌は、拾遺物名つくみといふをよんだもので、黒主の歌ぢや、鶉といふ鳥が、咲き匂うてをる花に心うかれて、弓射る人がねらひ寄つて、いたづきの矢が、身に入るをもしらでをるが、あぢきなくつまらない事である、との意で鶉の名を思ひ付く身といひ、又平題は、矢のさきの圓きもの、それを勞にかけていうたものぢや、

みつにはなすらへうた、

「君にけさあしたの霜のおきていなは戀しきごととにさえ

やわたらむ

といへるなるべし」

「これは物にもなすらへて、それがやうになむあるといふ也。此歌よくかなへりとも見えす。たらちめのおやのかふこのまゆごもりいふせくもあるか妹にあはずて、かやうなるやこれにはかなふべからむ。」

なすらへ歌とは、それに比準していふこと。

君にけさの歌は君がけさとある本が正しい、と正義にみえたが、それが宜しいさてあしたの霜は、おきてといはん爲においた詞ではあるが、それにあやなして、消えや汲らんといふたので消えるとは死ぬる事。悪しく思ふ度ごとに死ぬ程におもふ事ならんとの意。霜は消えるものであるから、其縁語でいふたものである。

よつにはたとへうた、

「わが戀はよむともつきじありそ海の濱のまさごはよみ

つくすとも」

「これはよろづの草木鳥けだものにつけて心を見する也。此うたはかくれたるところなむなき、されどはじめのそへ歌とおなじやうなれば、すこしさまをかへたるなるべし。すまのあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり、此歌などやかなふべからん」

たとへ歌とは、それに比喩してよむをいふ。ありそうみは、荒磯海といふこと。まさごは小砂利ぢや。よみつくすは算へ盡すこと。荒磯海の濱通にある數限りなき小砂利をば、數へつくすとも、わが人を戀ふる情は、際限もあるまじと也。

いつくにはたとごとうた、

「いつはりのなきよなりせばいかばかり人の言の葉うれ
しからまし

といへるなるべし」

(これはこととのほりたゞしきをいふなりこの歌のころさらになはすとめうたとやいふべからむ)

山櫻あくまで色を見つるかな花散へくも風吹ぬ世に

たゞこととは事物にもよせず只其事をありのまゝにより下すをいふいつはりの歌は戀の部にて解釋すべければ今は申さず。

むつにはいはひうた。

「此とのはうべもとみけりさきくさのみつばよつばに殿

づくりせり

といへるなるべし」

(これは世をほめて神につぐる也此歌いはひ歌とは見えすなむある。

春日野にわかになつみつゝ万代をいはふころは神ぞしるらむ

これらやすこしかなふべからむたほよそむくさにわかれむことはえあるまじきことになむ)

いはひ歌は即ち祝賀の歌といふこと 此とのはの歌は催馬樂の呂歌でうべは諾にてイカニモと諾する辭さきくさのはみつばといふにかゝる枕詞みつばよつばは三端四端なりといひ 又は三爪四爪也とも云ひ 諸説多けれど古く棟の事を間といふまとはとは殊に近く通ふ音にて三棟四棟也といふ説に従ふべきぢや 歌の意は此殿はかねて聞きし通り何さまいかに富み榮えてをる事ぢや 家造りのさまなども三棟四棟と多く立てつらねてをられてサといふのである。

今のよのなかいろにつき人の心花になりけるよりあだなる歌はかなきことのみいでくればいろごのみの家にうもれ木の人しれぬこととなりてまめなるところには花すゝきほにいだすべきことにもあらずなりたり。

今日世間の有様 一般色に流れ人情すべて華美におもむいたに依て自然輕薄な歌證なき詞ばかりをよみいだすやうになり來つて 歌といふものはた

好色家が内證事によみすさぶ丈のものと成つて、公正なる場所などでは、取
出す事が出来ぬもの、やうに成てしまつた事である」といふので、今の世中
とは即ち此古今集を撰ばるゝ時代を指していふ、「うもれ木のは、人しれぬに
かゝる枕詞、人しれぬは内々の私事にて、即ち公正ならぬこと、まめなる所
はマヅメの場所といふ事、花すゝきは、ほにいづにかゝる枕詞、ほにいづる
はあらはるゝことで、こゝでは表だつて持ち出すといふほどの事を、ほにいた
すといふ。

そのはじめをおもへば、かゝるべくなむあらぬ、いにしへのよゝ
のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々を
めして、ことにつけつゝ、歌をたてまつらしめ給ふ。

しかし其本を考へて見れば、左様にあるべき譯でない、古來歴代の天皇がた
春の花のうるはしく咲いたあした、秋の月の清くすみ渡つた夜などの、折々
毎に侍候してをる臣下に仰ぐとが有て、花又は月など其事によせて歌を詠

みて奉らしめられた事である。

あるは花をもてあそぶとして、たよりなきところにもどひ、あるは
月を思ふとして、しるべなきやみにたどれる心々を見給ひて、さか
しおろかなりとしろしめしけむ。

普通本花をそふとあるは誤で、一本もてあそぶとあるもてあ三字を寫しおと
したものであると、正義にみえてをる、今之に従ふ、「花を翫ぶとて便なき云々」
とは、或はまだ咲かぬ麓の雲をわけ、又は已にちりはてたる高嶺の青葉にさ
まよふ類をいひ、「月を思ふとしてしるべなき云々」とは、出づるを待つとて宵闇
にたゝすみ、入りしを惜しみて曉闇にたどるの類の事をいふ、これらさま
く趣向を立て、よみ出す歌につきて、其人物の賢愚の程をも、おのづから
御覧あらせらるゝといふのぢや。

しかあるのみにあらず、さゞれ石にたとへ、つくは山にかけて君
をねがひ、

しかあるのみにあらずは、左様に朝廷上の事のみにも限らず、すべて一己人の上につきて情をのぶるは此歌にありとの意で、是より廣く歌の用をあぐるについて集中にみえた歌に依て詞をあやなしたものである。「さいれ石にとへは」我君はちよにましませさいれ石のいはほとなりて苔のむすまでの歌つくば山はつくばねのこのもかのかげはあれど君がみかげにますかげもなし」の歌による。ねがひは仰ぎ望むこと、さいれ石つくば山の二つをうけていふ詞である。

よろこび身にすぎたのしみ心にあまり、ふじのけふりによそへて人をこひ、松虫の音に友をしのび、

さてこのよろこび身にすぎといふより以下、數句をならべて、さて歌をいひてその句にて一つに結んだもので、即ち喜悅の情が身に餘る時、又は歡樂が心に溢るゝ時、或は人を戀ひ、友を慕ひ、其他云々の折々歌によりて心をやるといふので、ふじの煙に云々はふじのねのならぬおもひにもえばもえ神だにけたぬ空し煙をの歌の詞により、松虫のねには、君しのお草にやつるゝ

古郷は松虫のねぞかなしかりけるによる、さてこれらの歌の解、此集にみえてをるものは前にも申す通りすべてその處で言ふこととして、今は御話し申しません。

高砂住のえの松もあひおひのやうにおぼえ、

高砂は一般の山にもいふが、こゝは住の江とならべていふもの故、播州高砂の事である。あひおひは相逐、相老などいふ説もあれど、相生の義といふ説が宜しい。我身の年老いたるより、高砂住吉などにある古木の松をみても、同齡の程にやあらんと思ひなさるゝをいふ。高砂住吉に松をいふは、此集中にも「かくしつゝよをや盡さむ高砂のをのへにたてる松ならなくに」「我みても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよへぬらむ」の類である。

をとこ山のむかしを思ひいで、をみなへしの一ときをくねるにも、歌をいひてぞなぐさめける。

男山のは今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものをの歌により、

上文相生のやうに覺えといふより男の老を歎く意にいひ、さて「秋の野になまめきたてる女郎花あなかしこままし花も一時」の歌詞にとりて女の老を歎く事をいふ、くねるは恨みかこつ意、女郎花のなまめきしも一時の間にして忽ちに老たるを恨みかこつといふ事、さてこれらはいはひ悦ぶにつけ哀しみ歎くにつけ、歌によりて思をはらすといふのである。

又春のあしたに花のちるを見、秋の夕暮にこのはの落るをき、是は只春秋の花紅葉について、感情をおこすをいふたまでで、歌によるまでの事ではないである。

あるはとしごとにかゞみの影に見ゆる雪と波とをなげき、草の露水のあわを見てわが身をたどろき、

「ゆく年のをしくもある哉、ます鏡みるかけさへにくれぬと思へば」「あらず玉の年の終になることに雪も我身もふりまさりつ」「露をなどあだなるものとおもひけん我身も草におかぬばかりを」「水のあわのきえてうき身といひな

から流れても猶たのまる、哉」これらの歌詞によりてあやなしたものである。

あるはきのふはさかえおごりて、けふは時をうしなひ、よにわび、したしかりしもうとくなり、

おごりての下、普通本にはけふはの三字脱ちてある、今は先哲の校正に従つて之を補ふ、こゝは人間の世の榮枯盛衰常なくして、盛衰によりて親疎を生ずるは世の中のありさまである、といふ事をいふのである、よに侘びの句は下の親しかりしもにかゝる詞、世上に志を失ふより親しかりし人も疎々しくなるといふのちや、時を失ひにつけてみるではない、しかし時を失ふからおのづから世に侘ぶる事ともなるは勿論である。

あるは松山の浪をかけ、野中の水をくみ、秋萩の下葉をながめ、あかつきのしぎのはねがきをかぞへ、

松山の波は、「君をおきてあだし心を我もたば末の松山波もこえなん」野中

の水は「いにしへの野中の清水ぬるけれども心の心をしる人ぞくむ」秋萩
の下葉「秋萩の下葉いろづく今よりやひとりある人のいねがてにする」あ
かつきの「曉の鳴のはねがきもはがき君がこぬよは我ぞかすかくこ」は
これらの歌に依つてかいた文である。

あるはくれ竹のうきふしを人にいひよしの川をひきて世の中
をうらみきつるに、

くれ竹のはよにふればことわざしげき呉竹のうきふしごととに驚ぞなく「よ
しの川は流れてはいもせの川の中におつるよしの川のよしやよの中これ
らのうたの詞に依るものである さて上にしかあるのみにあらずといふよ
り歌をいひてぞなぐさめけるとうけ 更に又はるのあしたに」といふより此
句までは皆物にふれ事に應じて心に感ずる所あらはれて歌となるをいひ
借さやうにありしところが、といひて次の詞をおこすのである ところがこ
にきつるにといふ詞を用ひた故である うらみきつるにといふは恨むとい
ふをのみをうくるではない 花のちるをみ、紅葉の落るをききなげきおど

ろきなどすべてをうけていふ詞である 「きつるに」といふ詞下に應せずとい
ふ説はよくも思はざる論である。

今はふじの山もけぶりたゝずなりながらの橋も造るなりとき
く人は歌にのみぞ心をなぐさめける。

こゝは古くから晝夜絶えずに立つて居た不二山の煙が絶えたる事と又古き
ものゝ例に常に言うて来た長柄の橋も作り改めらるゝやうに成た事との二
つをあけて世上のさまの遷り變るをのべ 借世上のさまの遷り變るは人の
心に最も大なる感動を興ふるものなるが、かゝる切なる感情に於ても是亦歌
に依てこそ其心をも慰るものであれと、一步を進めて説いたものである 前
には尋常普通の感につき歌をいひてなぐさめといひ、こゝには切なる感情の
上について歌にのみ心をなぐさむといふので、みの辭に目を注いで見れば、
一步を進めて説いたといふ事は、おのづからしられる事ぢや 然し此歌にの
み心をなぐさむといふは、古歌を吟誦する事で、前の歌をいひてなぐさめとい
ふは歌をよむ事、こゝは古歌を吟誦する事ぢやといふ説もある どちらでも

文義は立つ事ぢや 倍此つくるなりといふに造ると盡るとの二説があるが、橋には朽つとか絶ゆとかいふべく盡くとはいふまじくよし又盡くならば盡きぬなりといふべき筈ぢや 故にこれは造るの方であるといふ説が正しく思はれる。

いにしへよりかくつたはるうちにも、ならの御時よりぞひるまりにけるがのおぼんよや歌のこゝろをしらしめしたりけむ。

さてこゝよりは此古今集を撰む事を言はんがために、先万葉集の事をいふので 歌は昔からして右にいふ通り段々と傳はり來たりしものであるが、其内にも平城天皇の御時代よりして別して世上に廣く行はれる事となつた事で、かの天皇におかせられては歌の歌たる眞意を御悟り遊ばしたる事と御察し申しあぐる、と申すので かのおほむよとは平城天皇を申し奉る事なれど、憚りてたゞちには申さず、大御世とおほらかに申したのである 倍こゝでお咄申しておかねばならぬ事がある 此序文では平城天皇の御時に柿本人麿だの 山部赤人だの といふ人が有て、万葉集を撰まれた事のやうに書かれ

てあるが、それは大きな誤で、そもく「ならのみかど」と言ふに平城朝といふと、平城帝といふとの差別がある 平城朝は元明より光仁までの七代をいひ、平城帝は平安朝と成て後の帝で御位を去らせられての後、奈良の舊都に入らせられたに依て、平城帝と申した、それ故こゝにならの御時とあるはどちらにも聞える事ぢやが、後の文に、かの御時よりこのかた年は百年餘世は十つぎとあるに依てみれば、平城天皇を申す事は明かである 又人麿は持統より文武の慶雲比までの人で、平城朝以前の人 赤人は万葉に神龜元年より天平八年までの歌あれば、これは平城朝の人で、人麿よりは後ぢや、かやうに各時代が違つてをるに、同時の如くしるされ、又人麿は始め東宮舎人で、後石見、椽もしくは目の間にて終られ、卑き身の人なるを 正三位とかけるなどより、ころもなき事故、古來之を咎めて、古今集の撰者ともある程の人で、これ程の事も知らぬとは不都合ぢやと言ひ、又は之を助けて、後人の裏書が本文に紛れ入たのぢや、など色々にいふ事であるが、しかし此時代は今の世とはちがつて國史なり 萬葉なり 板本がないのみならず、世間に流布する本もなく、唯官

庫に秘藏せらるゝのみ位の事で何人となく之を考索するなどいふ事なかりし故であらうと安藤爲章氏がいはれたが眞直な論で穩かにおもはれ升しかし万葉をば見られた事は勿論であらうけれど國史に照して考索せらるゝ事などはなかつた事とみえてそれ故此一段は耳を捕へて鼻をかむやうな事ながら其まゝでお咄をいたす事である。

かのおほん時におほきみつのくらゐかきのもとの人まろなん歌のひじりなりけるこれは君も人も身をあはせたりといふなるべし。

かのおほん時は平城天皇の御時といふ事 おほきみつのくらゐは正三位といふ事 正をおほきともおほいともよみ 従をひろきともひろいともよむ 人麿の官職卑かりし事は前に申した通りであるから之を助けて文武の朝に立られた四十八階中の勤大三か務大三かの事であらうといふ説もあるが已に人麻呂を平城天皇の朝の人とする時は天皇は平安朝となりての天皇

にましませば文武朝の事も詮なき論といはなくてはならぬ さて君は右に申す如く歌の心をしらしめし臣も右の如く歌の聖なれば君臣合體といふべきであるといふのちや「ひじり」とはすぐれて賢き人をいふ稱でもとひはといふも火といふも異妙不測の物であるが其理を知るといふより出でた詞と申す事ちや又君も臣もといはず君も人もといふは天皇は現つ神と申して神にましく臣は皆人なる故に神に對していふと申す。

秋のゆふべ立田川にながるゝもみぢをばみかどの御目に錦と見給ひ春のあした吉野山のさくららは人まろがこゝろには雲かとのみなんおぼえける。

平城天皇の御製立田川紅葉亂れて流るめり渡らは錦中や絶えなん秋のゆふべ云々は此御歌によりて申すのちや 扱又人丸が歌に吉野山の櫻を雪にまがへたるはないが歌には常にいふ調故上の立田川に對してしばらく左様に申したのちやと先哲の説である。

又山のべのあか人といふ人有けり、歌にあやしくたへなりけり、
人まろはあか人がゝみにたゝむことかたく、あかひとは人まろ
がしもにたゝむことかたくなむ有ける。

(ならのみかど御うた

たつた川紅葉みたれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

人まろ

梅の花それとも見えすひさかたのあまぎる雪のなべてふれゝば

のほのくゝとあかしの浦の朝霧に島がくれゆく船をしぞ思ふ

赤人

春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしき一よねにける

わかぬ浦にしほみちくればかたをなみ芦邊をさしてたづ鳴わたる

赤人の時代は前に申した通りである、歌にあやしく云々は、歌をよむ事が不測
に上手であつたといふので、たへは堪能といふ事、即ち上手ぢや、人磨は赤

人が上に云々は、まさりおとりが定めがたきをいふ詞、其うち上にたゝむ事云々
々を人麻呂にいひ下にたゝむ云々を、赤人にかけてたるところ、即次第を見せた
るやうに見えるが、文章の妙なところである。注の梅の花と、ほのくゝとの歌
は此集中に入りて、いづれもよみ人しらすの歌ぢや、又春の野の歌は、萬葉
八にみえたもので、衣を摺らん料にとて我は董を摘みに來しが、春の野のさま
がいかにも面白きがために心がうかれて思はずも一晩そこになてしまつた
事よ、といふのぢや、又わかぬ浦の歌は、これも萬葉六にみえて、和歌の浦に
蘆が満ち來れば、これまであさりゐたる鶴も干瀉を失うて、芦邊をさして鳴き
ゆく、といふのである。「かたをなみは瀉を無みといふ事で、潮が満つるに依て、
求食をる瀉が無くなるをいふ。片男波と説くなどは、文學が開けぬ時代の事
で、論にも足らぬ事である。

此人々をおきて、又すぐれたる人々も、くれ竹のよゝにきこえ、か
たいとのよりくゝにたえずぞ有ける。

此兩歌仙の外にもすぐれたる歌人は、時世に應じて常に絶えずありたるをい

ふ 吳竹のはよ、にかゝる枕詞^{まくらことば}かた糸のはよりくの枕詞^{まくらことば}ぢや、

これよりさきの歌をあつめてなむ、萬えふしふと名づけられたりける。

此平城天皇の御代より以前の歌を集めしるしたものを名づけて萬葉集と申した事であるとちや、これは當時かやうな説が言傳へられてあつた故、それを其儘に書きしるしたものと見える。さてこゝにかやうにいうて、後の萬葉に入らぬ古き歌云々の端を開き、又人麻呂なくなりたれど云々の基とした事ぢや、

かの御時よりこのかた、年はもゝとせあまり、世はとつぎになむなりにける。

このところの文普通本は亂れて文義が立たぬ。今は遠鏡、正義等の説に依りて正しました。さてかの御時とは、平城天皇を申す。平城天皇の大同年より古今集を奏覽した延喜六年まで、年數百〇一年、平御天皇より醍醐天皇まで

御代數十代である。

こゝにいにしへの事をも歌のこゝろをもしれる人、わづかにひとりふたりなりき、しかあれどこれかれえたるところえぬところたがひになむある。

いにしへの事とは古代の事實といふこと。但しこゝは専ら歌の上に就いていふもので、古代の事實として歴史の事ではない。即ち前にみえたふじの烟長柄の橋の如き歌の上に就て世上變遷の事からの事。歌の心とは、あだなる歌はかなき言のみにあらず、眞實の歌の本意といふことで、即ち前にみえた歌の心をしらしめしたりけむとあるものと同じ意ぢや。ひとりふたりなりきは、其の數の極めて少きを示す詞、眞實に二人といふでないとは、次に六人の人をあげていふを以てもしられる事である。さてさうはいふものゝ、其人々又おのづからそれくの得失ありといふので、次の評語を引出すのぢや。

今此事をいふにつかさくらゐたかき人をばたやすきやうなれ

ばいれず。

今此事を言はんとするに當り、官位高き人の事を品評せんは自然輕侮するやうにも聞きなざるべければ、遠慮して申さずといふので、

そのほかに、ちかきよにその名きこえたる人は、すなはち僧正遍昭は歌のさまはえたれども、まことすくなしたとへば、るにかけ
る女を見て、いたづらに心をうごかすがごとし。

○(淺みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春のやなぎか

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく、

嗟峨野にて馬よりおちてよめる。

名にめでゝをれるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな)

官位高しといふ部分外で、近世の有名の人では、即ち僧正遍昭は、歌のさまを得て體裁宜しけれども、眞實の意が乏しいといふので、此僧正は口前が輕く、興あるさまによまれた故、シンミリととりしづまつたさまがないをいふ、譬の

意は、畫にかいた女は、うるはしく興ありとみえるけれども、精神がないものなれば、心を動かすも詮ない事ぢやといふので、口前輕く興あつて賑はしいを畫の面白くうるはしいに譬へ、誠の少ないを精神のなさに譬へたのである。さて注の歌は本集で説くべきに依て、例のこゝでは申さぬ。

ありはらのなりひらは、そのこゝろあまりてことばたらず、しほめる花の色なくて、にほひのこれるがごとし、

○(月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして、

大かたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のわいとなるもの、

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめば、いやはかなにもなりまさる哉)

在原業平の歌は、すべて心が至て深いからして、自然心が餘つて詞がいひ足らぬやうに聞える、といふので、萎める花の色なくては、詞の足らぬに譬へ、にほひ残れるは、心の餘るに比したものである。ちよつと見には目にとまらないが、よく見れば味があるをいふのである。

ふんやのやすひでは、ことばたくみにてそのさまみにおはず、い

はゞあき人のよききぬきたらんがごとし、

(吹からに野への草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ)

深草のみかどの御國忌に、

草深きかすみの谷に影かくして日にくれしけふにやはあらぬ)

文屋康秀の歌は、其詞を巧みに飾るを以て、其趣事實に應せざる所がある。譬

へて言はば、商人の美麗なる衣服を着たるやうであるといふので、あき人の云

々は、巧の美麗が事實に過ぐるをいふ。此時代には士農工商というて、商人を

ば四民の中でも最も下等なものとし、衣服なども最も粗末のものを着るが

常例のやうになつてをる事故かやうにいはれた事である。

宇治山の僧きせんは、ことばかすかにして、はじめをはりたしか

ならず、いはゞ秋の月を見るに、あかつきの雲にあへるがごとし、

(わが庵はみやこのたつみしかぞすむ世をうじ山と人はいふなり)

よめるうたおほく聞えねば、かれこれをかよはしてよくしらす

宇治山に住みし法師の喜撰といひし人の歌は、詞のさま幽玄とかすかに奥深

くて、一首の趣ハツキリせず、ボンヤリしたやうの處がある。譬へていはゞ清

くさやかなる秋の夜の月を賞翫するに、曉がたの雲が棚引いて光が隠れたや

うである。しかし其詠んでおいた歌が澤山傳はつてをらぬから、彼是に考へ

合して十分に知る事が出来ぬといふので、秋の月は清くさやかなるもの、幽

玄のさまに譬へ、はじめ終りは一首といふ事。たしかならずはハツキリと

せぬと言盡さずボヤケタ處があるといふのちや、曉の雲は曉には雲が迷ふ

ものであるから、いふたまでの事で、曉に別に意はないのである。さて此集に

撰まれた喜撰の歌は、只一首のみであるから、こゝによめる歌多く聞えねばと

あるを、此一首のみの事として説くは宜しうない。多く聞えねばといふ語氣、

三四首又は四五首の事と聞える。此時代は其位は傳はりてありしが、其中で

一首を取られたならんとの説に従ふべきである。

をのゝこまちは、いにしへのそとほりひめの流なり、あはれなる

やうにてつよからず、いはゞよき女のなやめるところあるに、

たり、つよからぬはをうなの歌なればなり、

○(思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを

色見えでうつろふ物はよの中の人の心の花にぞありける

わびぬれば身をうき草の根を絶てさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

そとほりひめの歌

わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも

小野小町の歌は昔の衣通姫の風である 感がふかいやうではあれどもよわ

しくて強いところがない 譬へていはゞ見目よくうるはしい女が惱み

煩らふ處があるに似てをる 其強うないといふのは女の歌であるからの事

ぢやといふので 衣通姫は允恭天皇の妃で御容色がすぐれて肌の光が衣を

徹すやうだから衣通姫と申したといふ事ぢや さて此いにしへ云々流なり

の一句は誤入であらうと先哲は申された 其故は衣通姫の歌と小町の歌と

は少しも似た所がないからとの事であるが何れの本にもかやうにみえて此

一句のない本はない 以上は此古今集の撰者達は左様に思はれた事と見る外

はない 又つよからぬは云々の句も後人の注のまぎれ入りしものであらう

といふ説あれど是亦かくあるからは此儘解くの外はないと思ひ升 さて又

衣通姫の歌はわかせこがくべき宵なりさゝがにのくものおこなひこよひし

るしもといふ歌で注なるは後に改めたものである。

大とものくろぬしは、そのさまいやし、いはゞたき木おへる山人

の、花のかげにやすめるがごとし、

(思ひ出て戀しき時ははつかりの鳴てわたると人はしらすや

鏡山いざ立よりて見てゆかむとしへぬる身はおいやしぬると)

○黒主は「下、そのさまの上脱文あるべき由先哲のいはれたは尤の事である

前よりの例によりてもこゝには何とか之を褒むる詞が有て、さて其さまいや

しと抑ふる詞を下すべき筈であるからぢや さて其褒めた詞を花のかげと

いふに、「下、そのさまの上脱文あるべき由先哲のいはれたは尤の事である」

このほかの人々その名きこゆる野べにおふるかづらのはひひ

ろごり、はやしにしげきこの葉のごとくにおほかれど、歌とのみ
おもひて、そのさましらぬなるべし、

右にあげたる外にも、歌に名の聞えた人々は、其數際限なく多しとはいへども、
歌は只かりそめの慰事で、好色家のもてあそび草とばかり考へて、謂ゆる天
地鬼神を感動せしむといふやうなる、歌の本意をばしらざる事であらうとい
ふのである。野へにおふるかづら云々は、其數の繁く多きをいふ。かづらは
蔓草の事ぢや、

かゝるにいますべらぎのあめのしたしろしめすこと、よつのと
まごゝのかへりになむなりぬる。

備是から此古今集を撰む事の仰を蒙りたる事をいふので、今すべらぎは今上
天皇といふ事で、即ち醍醐天皇の御事を申す。天の下しろしめすは、御治世と
いふ事。よつの時は四季にて、即一年の事。九かへりは九回にて、九年の事な
れば、醍醐天皇御即位昌泰元年よりかぞへて延喜六年までをいふのである。

あまねきおほんうつくしみの浪、やしまのほかまでながれ、ひろ
きおほんめぐみのかげ、つくば山のふもとよりもしげくおはし
まして、

おほんうつくしみは、御仁徳といふ事。やしまは、大八洲で、即ち日本。おほんめ
ぐみは、御仁恵。つくば山云々は、此集大歌所に、つくば根のこのもかのもに蔭は
あれど君がみかげにますかげはなしともありて、古來木の茂き由いひ來つてを
る。波といひ、流れといふは、八洲の縁語。蔭といひ、しげくといふは、筑波山とい
ふからの事で、即ち普遍なる御仁徳は、日本の外までも及び廣大なる御仁恵は、筑
波山の森林よりも繁茂せりとの事。此天皇は後世にも延喜の聖帝と申す程の
事であるから、徒に頌揚奉りたるのみの事ではない。

よろづのまつりごとをきこしめすいとま、もろくの事をすて
たまはぬあまりに、いにしへの事をもわすれじ、ふりにし事をも
おこし給ふとて、今も見そなはし、後の世にもつたはれとて、

萬機の御政事を聞し召さる、御いとま、御政事外の諸事にも大御心を注がせらる、からして古へのよ、の帝の御賞翫ありし事をも御忘却なさるまじく、又古來廢れたりし事をも御再興ありて、今日に於ても御覽遊ばされ、又後世にも未永く傳はらしめんとて、といふので、いにしへの事をもは前にみえたいにしへのよ、の帝云々及びいにしへよりかくつたはるうちにもとあるいにしへで、専ら歌の事をいふ「ふりにし事をもおこし」は即ち前にみえてをる色ごのみの家に云々、まめなる所には云々をうけて、歌のすたれたをいふもので、おこしとある詞で、ふりにし事とは古來廢れたといふ事であることを知るべきぢや。

延喜五年四月十八日に、大内記きものとも、御書のところのあづかりきのつらゆき、さきのかひのさうくわん、おふしかふちのみつね、右衛門府生みぶのたゝみねらにおほせられて、

大内記は詔勅宣命を草し、位記を取扱ふ職、御書所といふは延喜の朝に置か

大内記は詔勅宣命を草し、位記を取扱ふ職、御書所といふは延喜の朝に置か

れた事西宮記にみえて、その事を扱ふが御書所、預ちや、前、甲斐、目は、前方、甲斐國の屬官を勤めしをいふ、右衛門府生は六衛府中、右衛門の府生ぢや、六衛府とは左右近衛府、左右衛門府、左右兵衛府で、兵衛の事である、さて延喜五年四月十八日に、今古集を撰むべき旨の仰を蒙つたことである、大内記は中務被接の官で、相當正六位上から五位であるが、其外は皆卑官なれど、技倆でかやうに仰を蒙つたのである、

まんえうしふにいらぬふるきうた、みづからのをもたてまつらしめ給ひてなむ。

古き歌にて萬葉集に入らぬものをはじめ、これかれの歌及び撰者自身のよみたる者をも仰事にて撰み入れさせられたをいふので、かやうにはあれど、萬葉集に入りたる歌も七首程此集に入つてをるといふ、借此みづからのをも一句自身達の分はもとより遠慮すべきを、仰事に従ふ意を示し、且廣く一般の歌をも撰ばしめられるといふ意、おのづからしられるのである、

それがなかに、梅をかざすよりはじめて、ほととぎすをきくも

みぢをり、雪を見るにいたるまで、又つるがめにつけて君をおもひ、人をもいはひ、秋萩、夏くさを見てつまをこひ、逢坂山にいたり手向をいのり、あるは春夏秋冬にもいらぬくさく、の歌をなむえらばせ給ひける、すべてあうた、はたまき、なづけて古今和歌集といふ。

それが中にも云々は、其撰ばしめられたる集の中、四季をはじめ、それく、部類を分たれしをいふので、梅をかざすより云々雪を見るに至るまでは四季又鶴龜につけては賀、秋萩夏草は戀、逢坂山は旅と別とをいふ、手向を祈り、は、道祖神を祭る事、悉しくは本集の歌で説くべきである、春夏秋冬にも入らぬ云々は、雜以下雜体大歌所まですべてをこめていふのである、さて此集の歌は千百餘首で、其内墨消十一首を除けば、千九十九首であるが、大數より千歌といふので、卷數の廿卷は、今も同様である、借古とは奈良の都の末より、大同弘仁比迄をいひ、今とは齊衡貞觀比より延喜迄をいふならんと、先哲もいは

れてある。

かくこのたびあつめえらばれて、山下水のたえずはまのまさごのかずたほくつもりぬれば、いまはあすか川の瀬になるうらみもまこえず、さぐれいしのいはほとなるよろこびのみぞあるべき。

山下水 濱の真砂は枕詞、又飛鳥川は昔から淵瀬が變じ易い川といふより、之に依つて此後變らぬといふ事をいひ、さぐれ石は、かのいはほとなりての歌に依て万世を経て此集の重んぜらるべきを祝ふので、かやうに此度此集が撰まれた上は、最早名歌が散り失せて世に絶えるといふ事なく、其數も亦澤山集まつた事であるから、前にいひしやうに好色家に人知れぬものと變りゆくべき心配もなく、万世を経てますく、歌の鏡と貴重せらるべき事である、といふのぢや。

それまくらことば、春の花にほひすくなくして、むなしき名の

み、秋の夜のながきをかこてれば、かつは人のみゝにおそり、かつは歌の心にはぢたもへど。

此こそれまぐらの字は、いづれにしても誤あやまりませう。古こ來こ夫ままろらならんといひ「夫まわれらならんといひ、それがしならんといひ。又またわれら拙ちきならんなど、いろ／＼と説せつがあるが、それがしらといふ説せつが、一番いちばん隠かくかのやうに思おもはれる。「それ閑かんしら」と書かいたを、それまぐらと寫うつしひがめたのぢや、かを古こくは常に閑かんと書かく之これをまゝと寫うつし誤あやまつたは外ほかにも例れいがある。又またしをくゝと寫うつ誤あやまるは常に多おほくある。又また名の長ながいとは高たかいといふ事こと。春はるの花はなとあるに對たいして、秋あきの夜よとして、長ながいといふたのぢや。虚うそ名なが高たかいといふのぢや。人ひとの耳みみにおそりは、人ひとの聞きかん事ことを恐おそれといふ事こと。おそれをおそりといふは古こ言げんぢや。歌うたの心こころに耻はづとは、歌うたの心こころに對たいして耻はづるといふ事ことで、歌うたを心こころあるものとしていふのぢや。

たなびく雲くものたちゐ、なく鹿しかのおきふしは、つらゆきらがこの世

にたなびくうまれて、此事このことの時ときにあへるをなむよろこびぬる。

たなびく雲くもなく鹿しかは、たちゐ、おきふしといは、んためにおいたもの。おきふしは、おきふしにつけてといふ事こと、即すなはち立た立たおきふしにつけてといふのぢや。初はつ筆ふでの友とも則のりをおきて、貫つら之のらがといふは、此この序じゆは紀き氏しが書かかれたるからの事こと。この世よに同おなじく生なれは、此この四よ人にんの撰えん者じやう同どう時に生なれ合あうた事こと。此この事ことの時ときにあふとは、此この集しゆを撰えんましめらるゝ時ときに逢あふとの事ことで、それを深ふかく悦よろこぶといふのぢや。ひとまろなくなり、にたれど歌うたの事こととゞまれるかな。

かく撰えんまれたる上うへは、歌うた聖せいと稱しょうする人ひと丸まるは已まになくなりたりと雖いへども、歌うたの事こと永ながく世よに止とどまるべき事ことぞといふので、さて其その永ながく世よに止とどまりて絶たざるべき事ことを下文かぶにいふのである。此この文ぶんは論ろん語ごに、文ぶん王わう既すで没ぼつ、文ぶん不ふ在ざい、茲こゝ乎やとあるに依よる者ものと先まづ哲てついはれてある。又また此この歌うたの事ことといふを、勅ちやく撰えんの事こととするは宜よろしうない。やはり詞ことばの通とおり歌うたの事ことといふので、上うへ文ぶんに、その始はじめを思おもへばかゝるべくない。あらぬといふより、以下いひかの歌うた論ろんをこゝで結むすんで、さて其その結むすの細こま目めを下したにいふのである。

たとひとさうつり、ことさり、たのしみかなしみゆきかふとも、このうたもしあをやぎの糸たえず、松の葉のちりうせずして、まさきのかづら長くつたはり、鳥の跡久しくとゞまれらば、歌のさまをもしり、このころをえたらむ人は、大ぞらの月を見るがごとくに、いにしへをあふぎて、今をこひざらめかも。

このうた云々、普通本には此うたのもしあるをやとあり、今は遠鏡、正義等の説に従ひ、異本に依て改めた事である。借青柳、松の葉、正木のがづらは、鳥の跡等は、例の枕詞で、かやうに撰び集められた上は、よしや時世が移りかはり、世事改り、樂み變じて、悲みとなる事ありとも、此集の歌若し絶ゆる事なく、散失せず、長く傳はれ、久しくとゞまつてある事ならば、歌の歌たるさまを知りて、能く其旨趣を辨へたらむ人に於ては、此集を見る事、恰も天上に澄渡る月を仰ぎ望むが如く、此集に入りたる奈良の京より、今日に至るまでの歌を賞玩珍重して、其風調をこひ願はざらんやといふので、抑此序にかやうに言はれ

たるは、もとより万一の希望を記したのなる事は、この歌若しとある詞にて明かである。然るに其希望の如く、此古今集は千載國歌の鑑として尊重せらるゝのみならず、注釋書さへ算へ盡しがたき程なるに至りしは、紀氏を始め此撰者達も、定めて地下に案外の事として大悦せられる事であらうと思はれ、升

古今集詳解

中 邨 秋 香 講 述

加 藤 さ み 子 筆 記

古今和歌集卷第一

古今と名けた事は、序に見えてをる通り、又和歌といふ事の謂のない事も、序のやまとうたといふ詞についてお話し申した通りであり升。

春歌上

ふるとしにはるたちける日よめる、 在原元方

「ふるとし」は新年より舊年を稱して云ふ名詞ぢや。故にこゝも春の部からいふ故に、ふるとしと云ふたぢや。然るに惠慶法師の歌に「白雪のふるとし」が、ら庭の梅は花とかこちて匂ひやはせぬ、と年内にして云ふのは誤ぢやと先哲も已にいはれてある。はるたちける日は、即ち立春の日で、大寒後に來る節ぢ

や さて又此はし書は歌又は歌詞に關係のあるもの、外は今は大左巻しま
す 又作者の上の事も同じく歌の上にあづからぬ事は是又講じません
としの内に春は來にけりひとしをこそとやいはんこととしと
やいはむ

正月元日より十二月晦日まで月日の一回するを一年と云ひ 立春から節分
まで、歳星の一周するを一歳といふ さて年といひ歳といふは字にこそは差
別もあれど詞の上には共にとしといふ事であるから之を以てあやなした歌
である ○今は十二月でまだ年内であるのに 春は早く立つて來たわい
してみると立春の上、即ち歳の字からいへば、これまでの一とせをば去歳と云
うて當然のやうちやが 又十二月と云ふ上、即ち年の字からいへば、まだ十二
月であるから やはり今年と云うて當然のやうでもあるといふので、とち
らが當然であるべきかと云ふを言外に示したので、としの内には春は來にけり
といふ二句におのづから年と歳との區別を去らせ、さて年と歳とにつきて
の趣向を面白く言回した歌である 此歌古來諸説多けれど、いづれも要領を

得ぬ、畢竟年と歳との字について、あやなした處が面白いので、實に開卷第
二におかれた價直がある歌である。

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

袖ひちては袖をひたしぬらす事、結ぶとはすべてこれと彼とを組合はする
事、糸を結ぶ、縁を結ぶ、契を結ぶの類、水に云ふは兩手を組合せ、すくひ
などするを云ふ、○暑い時分袖をひたし濡して、すくひあげなどして賞玩し
た水の、いつか寒い時節となつて、氷つたのを、かく立春と云ふからには
今日よりの風は、又この氷を吹き解く事であらうと云ふので、時節のよどみ
なく、速かに移り變りゆくさまを、立春についてつくづく感じたさまが、言外に
溢れて誠に感の深い歌である、まかしこれを袖ひちて結ぶといふは夏、結
びしのしは過去で、秋から夏をいふ辭なれば、即ち秋ちや、氷れるをは冬、さ
て春たつといふは春で、四季をよみこんだものぞと解くなどは、あまりに入
立ちすぎた説である、借又此歌は趣向は前に言うた通り、時節のよどみな

く移り變るをのべ 又詞の上では結ぶとかかり解くとうけてかけ合せをおもしろくしたものである。此かけ合せの事を先哲はまだ説いておかれなただはよみ人の爲になげかしい事である。

題しらず、

よみ人あらず

春霞たゝるやいづこみよし野の吉野の山に雪はふりつゝ、

この歌は吉野の山にいまだ雪が降つてあるに一方の空は早く霞みはじめたを見てよんだもので普通本にはたてるやとあるが異本にたゝるやとあつてそれが宜しいと先哲もいはれた故今も之に従ふたゝるやはたちあるやといふ意でやは歎息のやで立つてをるはマアといふ程の辭ぢや、○あれあの通り春霞がほのくゝと立てをるはマアいづこいかなる場所であらうかかしこにみえる吉野の山にはまだあのやうに雪が降りつゝしてゐるものをさてくゝといふのでいづこは土地をさしていふものではるかに霞む空を望み見てあの霞んでをるは何方の地ぞといふのぢや。霞の立といふはどちぢやといふではない又霞んでをるはどこの空ぢやといふでもない古

來の解釋はいづれも叶はない「みよしの、吉野の山はさひのくま檜の隈川といふと同じで詞を重ねて調をのどめたので後世の歌ならばこのところにはかの見ゆるとか又は見渡せばなどいふ詞を入れべき處であるをかやうに詞をかさねて調をのどめたところから其調の上に、おのづから遙に顧みたといふやうなさまが生ずるといふが妙といふべき處である 賀茂季鷹の歌に「朝日さす愛宕の高嶺雪消えて願みすれば霞む大比叡」といふは得意のものともみえて多く短冊にかゝれた事であるが、かへりみすればと斷つたと、只みよしの、よしのと重ねた此歌とを照し合せて味つて見たなら 幽妙といふ事もおのづから會得せられうと思はれ升 偕又つゝと云ふ詞は今はないからといふやうな意に用ひるが、それとは少しちがふ 雪がふりつゝする事よさてくゝといふやうな意をいひさして含めたものぢや「わが衣手は露にぬれつゝ」「わが衣手に雪はふりつゝ」いづれも同じである。

二條のささきの春のはじめの御うた、

○雪のうちには春はきにけり鶯のこほれるなみだいまやとくらむ

まだ冬景色その儘である雪の中に 早くも春は立て来たわい これでは冬の内から来て居る鶯の氷つてをる涙も 今からは定めてもはや解ける事であらう、といふので かやうにいうた上に自然と今からは解けるはしく鳴くやうになるであらう、といふ意が言外にまられるので、こゝが面白い處である。鶯や雁やなどに涙といふは、なくといふからいふ詞である。鶯は里に出ても時が至らぬうちは鳴かぬものである。此御歌はそれを仰せられたのちや冬の内から鳴いてをる鶯が、更に花やかに鳴くならんとの意と解くは聞えがたい説である。さて鶯の氷れる涙がどくるならんというて、雪の解くるにあやなしたのである。

題しらず、

よみ人志らず

梅がえにきゐる鶯はるかけてなげどもいまだ雪はふりつゝ

此歌の三句春かけては、古來諸説紛々ちやがげにと思はれる説もないと云ふは、鶯は春の鳥であるから冬かけてなくとは云ふべけれど春かけてとは云ふべからぬ事故である。之は或人の説に春つけてを春かけてと寫誤りしな

らんといふた由、因幡の正音法師が申されたが、此説が至極と思はれる。つをかに又かをつに誤寫した例は、物語文に澤山ある。依て今は春告げてとして講じます。○冬の内から梅の枝に来てをる鶯は、今はもはや春が来たと告げてなく事である。なれども尙ほ今以て雪は冬のまゝに相もかはらず、ふりつゝしてをる事よ、さて「と歎を含めていうたものちや、此歌などは、ふと一吟したばかりでは、別にかはつて面白いと思はれる處もないやうちやが、再三再四吟誦してみると、上の句をさらさらとよみ下して、さて四の句になくとも、上の句をうけ、さていまだと轉じて、五の句にうつるところ、いかにも力が有て、甚だ強いといふがわかる。歌は四の句即ち腰が大事である、といふ事も此歌などで合點すべきぢや。儲これもきゐる鶯は冬からして里に出た、それが春を告げて鳴きだしたといふのである。

雪の木にふりかゝれるをよめる、 素性法師

春たてば花とや見らんあらゆきのかゝる枝にうぐひすのな

今はすでに春が立つた事であるからして 花とみる事でもあらうか あの
 白雪がふりかゝつて居る枝を 寒さうもなくあらうから傳ひながら鶯が
 くつきつて居る處へ 鶯が来て鳴くさまをよんだものゝなほなくは鶯のな
 くといふとは大なる差別がある。そといふ時はなくは其結びとなつて言ひ
 納める事ぢやがのといふ時はなく事よとか なく事かとかいふ歎息の意
 を含むものとなるである。

題しらず

み人あらず

心ざし深くそめてしをりければきえあへぬ雪の花と見ゆるか

ある人のいはくさきのおほきまうちぎみの歌なり
 「そめてしのはつよめの辞」そめてはそれに心を留めること「きえあへぬ
 は、きえんとしてまだ消えぬ事、消えきれぬと云ふほどの詞ぢや」さて五の
 句、普通本に「らんとあるは誤であるか」とあるが正しいとの事は、先哲皆云うてあ
 る。實にさる事では「らんで」はをりければの句とかけねはぬ事ぢや、故に今あら

ためました。○かねく花が早く咲けばよいと志を深く花の上に留めて居
 つた事である故かして、あのまだ消えきらない雪が、ふと花のやうにこち
 が目には見えることでもあらうか、といふので、これは遠山などに消え残つ
 てをる雪が、丁度花のやうに見えるを見て、よんだものであらうといふ説がよ
 ろしい。

二條の後のとう宮のみやすむ所と聞えけるとき、む月三日お
 まへにめしておほせごとあるあひだに、日はてりながら雪の
 かしらにふりかゝりけるをよませたまひける、

ふんやのやすひで

「東宮の御息所は東宮を生み奉りたる御息所といふ義で、東宮の妃と云ふ事では
 はない。御息所と云ふが、東宮又は親王の妃の稱となつたは、鳥羽の朝以後の
 事で、其前は天子の御寝に侍する人を稱して云うたものである。これは歌の
 外の事ながらお心得のために序故お話し申すぢや。」

春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびし

皇太子の御身をさし奉りては東宮と申し宮をさしては春宮と申すは此時代の
 のならばせである それ故東宮の御息所の御愛願を蒙ることを春の日の光
 にあたるというたのである 頭の雪は年老いて頭髮が白くなることをいふ
 ○春の日の光即東宮の御恩恵を蒙る私の身分は誠に有難く頼もしい事では
 有升けれど しかしかやうに年老いて頭髮か雪となる事が、訖しく心細い事
 でござり升といふので言外に長く御恩恵をうくる事も叶ひがたからんと
 意を含め 又春の日の光があたれば雪も氷もとける筈なるに却て頭の雪と
 なるといひなしたのが面白いのである

雪のふりけるをよめる、
 霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里もはなぞちりける

もはや空にも霞が立はじめ 又色々の木のこのめも張出る春となつてかや
 うに雪が降るときは 地前がす下に春げしさを催して居る事故に 花のな
 い處にも花が散る事であるわいと云ふので 雪をそのまゝやがて花とみて

きのつらゆき

云うたのである さて木の芽も張るを春にいひかけ春の雪ふればと流暢に
 さらくといひ下して春といふに對へて花なき里も花ぞとうけたるさま調
 がやすらかで姿がいかにもうれしいのである

春のはじめによめる

藤原のことなほ

春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯たにも鳴ずも有るかな
 春はモウきたのをなんで花はまだ咲かぬであらう 春のき方が一體早すぎ
 たのか 又は花の咲き方が一體おそすぎるのか 鶯がないたらそれどころ
 らと云ふ事がわかるであらうに その鶯でさへも鳴かない事よなア、と云ふ
 ので 鶯がなかなからは花のおそいのではない、と云ふ事はわかつて居る事
 なれど、さやうの理窟をおさす、あどけなくいうた處が面白いのちや 倍これ
 も一二の句に問かけを重ね、之をうけて聞わかんとおき、さて鶯だにもとい
 たかけ合せ、四の句の語勢強く聞えて、五の句の歎をいかにも深からしめたも
 のである

はるのはじめのうた、

にぶのたどみね

春きぬとひとはいへども鶯のなかぬ限りはあらしとぞたもふ

春が来たと世間の人は云ふけれども まだ鶯の聲が聞えない 鶯がなかなか
いで其聲が聞えない間は わしはどうも春が来たではあるまいとばかり思
はれるといふので 鶯の聲ののどかにいかにも春めいて聞えるを愛するの
まりに、一途に思ひこんで、あどけなくいうたが面白いのである

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた、 源のまさずみ

谷風にとくる氷のひまごとに打出る浪や春のはつ花

この歌は、谷川の水をみおろしてよんだものとしてみるべきである 其由は
谷風といひ又一首のさまでおのづからしられる、○春が来て段々とゆるんで
ゆく東風に吹かれて 今まではりつめて居た谷川の氷も、こゝかしこが解け
初めて その間々から打出す浪は 丁度花のやうに見える これが即ち春
の初花ともいふべきものであらうかといふので 興のあるよみかたである

紀のともりの

花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

「たぐへ」はつけ添へる事 「しるべ」はこゝでは案内と云ふほどの意に用ひたの
である、○咲初めた梅の花の香を 吹く風につけそへてサ、わしが待ちかね
て居る鶯を誘ひ出す案内者としてつかはす事である、といふので、さうしたな
らば鶯は必ずくるだらうと思ふから、と云ふを言外に含めたものぢや、花の
かは梅の花の香を云ふ梅には鶯がつきもの、やうに昔からいはれてをるか
らである

大江千里

うぐひすの谷よりいづる聲なくば春くるを誰かあらまし

鶯は幽谷を出で、喬木に遷るなど云うて 古來谷より出づるものと云ひな
らつてをる、○鶯が谷から出でてきて鳴く聲がなかつた事ならば 春が立つて
来たといふ事を誰がしらう事ぞ、誰も決して知るまい、といふので 實に鶯は
一般の人に春を知らせる鳥ぢや、といふことを言外にしらせた歌ぢや 「谷よ

りいづる聲は谷から出で、鳴く聲といふ事で谷から出るときにの聲といふではない

在原棟梁

春たてど花もにほはぬやまざとはもの事かるねにうぐひすぞなく

「ものうかるねは懶くある音で氣がのらず鳴きともないやうな音といふ事、○春となつてもこれといふ花も咲き匂はぬ山中の里ではいかにも氣がのらず、鳴きともないやうな聲で鶯がサ鳴く事ぢや」之は春猶寒くして例年よりも花がおくれ、それ故鶯もまだ十分に鳴き得ないのを、かやうにおもしろくいひなしたのである

題しらず、

よみ人しらず

野べちかく家ゐしをれば鶯のなくなるこゑはあさなあさなき

わしは野邊近く住居して居る事ぢやゆるに平常何事も不便不都合が多いが、其代りに鶯がなく聲をば毎朝々々かゝしなくきて殊の外心を樂ます事ぢや」と云ふで「なくなる聲はといふはのてにをばで家ゐしをればの下おのづから万事不自由なれど」と云ふやうなる意味がしられるのである、こゝが面白い處ぢやさて又「朝なく」は毎朝といふ程の意で、やがて日々といふことゝなる、朝の字に拘泥すべきでない、鶯は朝の聲が最のどかに聞ゆるものなれば、などいふ説はうけがたい事である

春日野はけふはなやきそ若くさの妻もこもれり我もこもれり

春日野は奈良の傍にある地名「なやきそは焼く事勿れと禁止止むる事、春日野山を焼く事は畑を開き、又は其やきたる灰を肥料ともする爲なる事、古今同じ事ぢや」若草の「はつまといふにかゝる枕詞ぢやが、こゝでは「つまもこもれり」までにかけてみるのである、春の野に生ずる草が、まだ土を破りきらぬは、つまのこもるぢや、つまとは若草の芽の事、若草の芽の事を先出づまといふを以ても知るべきぢやさて此歌では妻を携へて野遊するを、若草の土にこもると

いふにかけてつまもこもれり云うたのちや。○此春日野をば 今日焼く
といふ事はなさであれよ なせなればやがて生長すべき若草のつまがこも
りて居るから といふにかけて即ち我が妻が遊んで居り 又我もそれと一
緒に遊んで居るからといふのである 此歌は古調で姿がさら／＼としてい
かにもけ高いさまである、奈良朝時代の人の歌であらうと古人もいはれたが、
實にそれに相違あるまいと思はれる

春日野の飛火の野守出て見よいまいく日有りて若菜つみて

飛火野は春日野の内にて飛火を置かれし處ぢや、それ故とぶひ野といふ飛
火は烽火の事を古く左様にいふたのである 野守はその番人ぢや 昔は
春は野に出て若菜を摘んで遊ぶを風習とした事である、○もし／＼その春
日野なる飛火野の番人よ（そちは平常野に居る事故野の様子は大小ぞ知つ
て居る事ならんが）鳥渡出て見てもらひたい、まづ幾日立つた事なら 若菜が
はへて摘む事ができるであらうか、といふので、若菜摘のために其萌出るを待

ちかねるさまが言外に溢れてをる

み山には松の雪だにきえなくに都は野へのわか菜つみけり

わしが住居してをる此の深山には 松につもつた雪でさへも まだとんと
きえずにあるのに あの都人ははや野邊へ出かけて 若菜をつんで遊ぶわ
いといふので 深山と都とはかゝも様子がかはるものであるか、さて／＼と
云ふを餘韻にしらせたものぢや 「松の雪だに」と云ふので、一般の雪のまだ深
ささまをしらせたのぢや

梓弓おしてはるさめけふふりぬあすさへふらばわかかなつみで

「梓弓おしてはる」といはん爲においた詞で「おしては」一首の上、別に意はな
い弓を張るには押たわめて張るものぢや、○春雨は今日終日降りくらしした事
ぢや 此分で明日までも降る事ならば、定めて若菜が萌え出る事であらうか
ら 摘みに出かける事としやうと云ふのである 借此おしてと云ふを押な
べて春雨がふる事といひ 又は晴よと思ふ雨がしひて降るを云ふなど説く

一八
が如きは何れも従はれぬ 又あすさへの荷をも今日は雨故見合せたが若
し明日さへ降る事ならば雨天でも若菜つみにゆかんと説くなどもうけがた
い 只おほらかに明日さへふるならば萌え出べきであるからとみるがよい
のちや 借これも若菜摘を楽しんで待かねる様子が言外にしろれるのちや
仁和のみかどみこにおはしましける時に人にわかなたまひ
ける御歌、

△ 仁和の帝は光孝天皇の御事で、まだ親王でましくたる時と申すのちや

君がため春の野に出てわかたむ我衣手に雪は降りつゝ
そのもとへ進せんと思つてこの初春の野邊に出かけて若菜をつんだ處が
我が摘む袖に雪がふりつゝして殊の外寒い事であつたといふので
若菜はかやうに辛苦して摘んだものちやといふ意を言外に示させられた御
歌である

歌奉れとおほせられし時よみて奉れる、 貫之

かすがのいわか菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ
「ふりはへては」と更にわざと「といふ事」此歌ではそれをこれ彼の人々がた
くれ先だち互に招き合ひつゝ行くさまにかけていうたのちや 袖をふりつ
ゝあるきつれてゆくといふではないと正義に言うてあるが宜しい 此頃ま
では袖をふるといふは人を招く事にいうたのである 借又此袖をふるとい
ふを専ら女の事とするも宜しくない昔は男女共に人を招くには袖をふつた
事で万葉のあかねさす紫野ゆきしめ野行き野守はみずや君が袖ふるといふ
は大海人皇子の御事に申したても明な事である 白たへの袖は白袴の衣服
ちや枕詞ではない○あれあのやうに人々が白袴の袖ふりはへて、こと更に
なたの方角をさして互におくれ先だち招きかはしつゝ行くは 春日野の若
菜を摘みにとての事であらうといふのでゆくらはつみにやゆくらんとつ
ゝけてみるのちや 袖ふりはへてゆく人を見てあれは春日野の若菜つみに
行くならんと思ひやるので 若菜の時分ちやから袖ふりはへて人が行くで
あらうかと思ひやるではない さてこの互に招きかはしつゝ行くといふを

殊更にわざわざといふに掛けて袖ふりはへてといふがおもしろい詞づか
ひで 又一首のさまも調がのどかだまことによい歌である
題しらず、

在原行平朝臣

春のきる霞のころもぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

霞のころもは霞のうちなびきたるさまが布を引はへたやうにみえるから、や
がて衣といひなし衣といふからその縁語で「春のきる」と云ふたので、霞は春の
ものぢやからいふたまでぢや さて衣といふから、又緯とも云ふので、衣には
経をたてといひ緯をぬきと云ふ 「うすみ」は薄くてぢや山尋み風を寒みなど
云ふみはすべてくてといふ事委しくは皇國文法釋義にいひおきました 「べ
らなり」はべくありさうぢやと云ふ事此べらといふ詞は此時代には多く用ゐ
られたが後には又用ひられぬやうになりました。○春が着用する霞のきもの
は、よ糸がいかにも薄く見えてをるから、あれでは山風が吹くと破れ
亂るべくありさうぢやと云ふので 霞のよこのむらゝと云ふと、破れ
るを見ていうたので 言外にされば山風はどうぞふかぬやまにしたいもの、
といふ意がしられる

といふ意がしられる

寛平の御時ささいの宮の歌合によめる、源宗于朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色増りけり

「ときは」は常しなへにかはらぬ事、歳いはいの如くなるを云ふ詞、「一しほ」は一層と云
ふ事物を染めるに、一たび染汁の中なかに入れるを一しほと云ふからの事で、それ
を數多く重ねて濃く染めるを干入ともいふ、○いつといふ事なく、平常變る事
のない松の緑、即ち青緑の色も 春が來ての上では 更に今一層染めました
やうに色がまさつてみえるわい、といふので 春といへば何事によらず物新
しきやうに覺ゆるから、其情よりしてかくいうたのである

歌奉れとおほせられし時、よみて奉れる、つらゆき

我せこが衣はるさめふるごととに野べのみどりぞ色まさりける

我せこがころもほはるといはん爲ためにおいた詞で、わがせこは妻より夫をさし
ていふ名詞、衣をはるは女の業ぢやから、今は姑く女の口氣くいきでよんだものぢ

や さて着馴れた衣服を洗濯して張りなどすれば色は段々さめるものぢや
がこれはふるたび／＼に色がまさるとあやなしたのぢや、〇わが夫が着馴し
たきものを洗濯して張るといふ春雨が降るたびに、あの野邊の草は段々生
長して、緑の色がサます／＼立まさることであるわい、といふので「野べの
縁ぞとつよくいふうちに、おのつと衣服の色さめるとは反対で」といふ意を
含むのである、こゝかおもしろいぢや

青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花のほころびにける

「よりかくる」は縫ると云ふ意で、かくるには別に意がない、〇糸は通常縫ひを縫
ひつゝいるものなるに、青き色の柳の糸を縫りかける春に當ては、却て花が
サ咲き綻びる事であるわい、といふので、例の言外にさて／＼あやしい事だ
あるといふ意を示す、春しもそのしもぞは強く其ものをさしていふ辭である
から言外におのつと却てといふ意が生ずる事である、委しくは皇國文法釋義
に例をあげていうておきました、又花の綻びると云ふは咲く事をいふのぢ
や、これらも巧な趣向をいかにもやすらかに、すらくとよんだものである

西大寺のほとりの柳をよめる、

僧 正 遍 昭

西大寺は羅城門外の西にある寺の名ぢや

淺みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

「あさみどり」は緑のうす色で、即ち薄もえぎの事、〇あれ／＼あの柳はうすもえ
ぎの糸をよりかけて、真白な露を玉のやうに、マアつらぬいて、あゝきれな
い事よナアと云ふので、柳かは、柳かなと歎する詞問ひかけのかではない、顯
昭本の古本には「玉にもぬくか春の青柳」とある由正義にいはれて、其方よろし
いとあるが實にさやうちや、玉にもぬくか春の青柳の方調もやすらかで姿
が大いにたちまさる事である

題しらす、

よみ人しらす

百千鳥さへづるはるは物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく

「もゝちどり」は百鳥と云ふと同じで、いろ／＼の鳥の事、春は色々の鳥のなき囀
る者なれば、云ふのぢや、借この「もゝちどり」と「よぶこ鳥」と「いなおほせ鳥」

とを 昔は殊の外むつかしく云うて古今三鳥の傳などへ云うた程の事
である。〇いろくの鳥がさまざまの聲で面白う鳴きさへづる春は 万事万
物ことごとく改まつてすべて新しくなる事であるけれども 唯我身ばかり
は改まらないで年々歳々ふるけてのみゆくことである。といふので あいな
げかはしい事であるとの情を言外に示したのである。
をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶことど
りかな

「をちこちはあちらこちらと云ふ事、それ故遠近の字をあて、書く「たづき」は
手着と云ふ義で、先づは手寄といふ程の事、たづきもまらぬは様子もわからぬ
と云ふ程の意ぢや、「よぶ」鳥は布穀鳥で、俗にいふ喚子鳥の事、深山にすむ鳥
これを昔は前の百千鳥などと共に秘事として、仰山に言うた事である。さて
此歌は深山の中を分けてゆくとき、喚子鳥の聲を聞いてよんだもので、〇あち
らこちらの様子もとんとわからず、ゆくての道も心もとない此山中なるのに
更に喚子鳥のとりとめもなく不確に呼ぶことよ、さて「く」と歎じたのち

や、これを山陰をゆくに、たづきもまらぬ山中の方で呼子鳥がよびたつるこ
と、説くはよろしくない 歌のさま左様には決して聞えぬぢや
雁のこゑをきしてこしへまかりける人をおもひてよめる、

九河内躬恒

雁は北へ歸るものといへば歸雁の聲を聞きて、越の人を想ふぢや、越は山城の
京の北方に當るをもての故ぢや

春くれば雁かへるなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし

雁は秋來て春歸るものぢやから、春くれば雁かへると云ふ「みちゆきぶり」は
道ついでと云ふ事 雁は空を飛ぶものぢやから、白雲の道といふのぢや、「こ
とやつてまし」は言や傳へまして、即ち言傳をせやうかと云ふこと、〇春にな
れば雁が歸ることぢやが 歸るは北の方へ行くものぢやから、あの越の國
の空を通行してゆく事であらう、さらばその空の道ついでに、わしが戀しい
と思つて居る人の所へ、どりや言傳をしてやらうといふので、今の世では電

信といひ郵便といひ自由であるから、此歌などはちよつとわからないが、雷信はさておき手紙のおくり方もない昔の世では、實にかやうに思ふた事であらう。

かへる雁をよめる、

伊

勢

春霞たつをみすて、行雁は花なきさとにすみやならへる、

霞が立つ時節になれば、花も程なく咲くことである。然るに霞の立つを見すて、

あれあのやうにかへりゆく雁は、全體花と云ふものがない所に住なれ

て、花のうるはしく面白いものぢやといふ事を知らんからの事であるかといふので、

どうもさうしか考へられぬといふ意をいひのこしたのである。

題しらず、

讀人しらず

折りつれば袖こそにはへ梅のはなありとやこゝに鶯のなく

梅が枝を折たれば、かやうに深くわしの袖は匂ふ事である。しかし其梅の花は此處にありませぬものをあまり匂ひが高い故に、梅の花がある事かと思

ふかして、鶯がこゝにちかく来てなく事かいといふので、「袖こそ匂へ」とい

うてありとやこゝに」とうけた語勢で、おのづと梅の花はこゝにありませぬもの

をといふ程の意をあらはすので、こゝが面白いところぢや。

色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰が袖ふれしやどの梅ぞ

「あはれ」とは、よろこぶにも、めづるにも、又楽しむにも、哀みなげくにもすべて心に感ずるときに、あはれと聲にあらはるゝ者が即ちこのあはれといふ詞ぢや。

それが今では哀みなげく事にはばかりいふ事と成たので、こゝは賞翫する事をいふたのちや○この梅の花は色も勿論よろしいが、しかし香氣がサ、別

して賞翫すべく思はれる事ぢや。こんなによい香のするは、これは誰ぞ此花に袖を觸れたに依て、其香が移つて、かうかをる事であらう。誰がマア袖をふれ

さはらせた此庭の梅の花であらう、と云ふので、昔は衣類をば香でたきこんで、よくかをるやうにし、又それ故香の合せ方にも深く注意して、なるたけよいか

をりのするやうにとつとめたものである。さて又やどは家門にて、牆門に對

古今集詳解卷上卷之一

するもの軒先までをこめていふ名ぢや

三八

宿ちかくうめのはなうゑじあぢきなく待人の香にあやまたれぬる

あぢきなくは味氣無くではりあひなくつまらすいやな氣持のするを云ふ
「待つ人の香」は、これも衣服のかをりの事ぢや、〇もうこれからは家の近邊へは、
梅を植ゑて花を咲かせるやうな事はせまい、といふものは梅の花の匂ひが
とかくわしの待つてをる人の衣の香にまがうて、きたかと思へばさうで
はなく、はりあひがぬけてつまらすいやなあぢきないきもちがするに依て、
との意で「あやまたれぬる」の下ことゆゑに「と云ふほどの意がおのづからこも
る、又梅をばうゑじ」といはで梅の花うゑじといふが、をさなくて面白いと正義
にいうてあるが實に其通りぢや

うめの花立よるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける

「立よるばかりは立よらんとせしまでの事で、いまだ立よらぬ程の詞と正義に
あるが宜しい」「大空におほふばかりの曲」「月の桂もをるばかりなどいふば
かりと同じで、立よる程であつたといふ位の詞ぢや」「人のとがむるは、人が何
故の香なるぞ」と怪み問ふこと、是も人に近づいて、其香が移つた事だらうと、人
が疑ひ問ふをいふのぢや、〇わしは古鳥渡梅の花のもとに立よらんとしたま
での事で有たのに、はやモウ、人がそれは何故の香なるぞと、疑つて問ふ程
の香が移つた事であるといふので香氣のいかにも高い事を言外にしらせた
のぢや

うめのはなを折てよめる、東三條の左のたほいまうち君
鶯の笠にぬふてふうめの花折りてかざしむ老かくるやと

この歌は、催馬樂に青柳を片糸にぬひて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠とあるに
依てよんだもので、ぬふてふは縫ふと云ふといふ事、〇梅の花は鶯が笠に縫ふ
ものぢやと云はれて居るが、笠は形を隠すものぢやから、わしもその梅の
花を折取つてつむりへさして見やう、さうしたならば、この通り年よつた形

もかくれてまふかもしれんからさ。

題しらず、

そせいほふし

よそにのみあはれとぞみし梅の花あかぬいろ香は折りてなり
けり

よそにばかり即ち立木のまゝでばかり あゝきれいな花ぢや賞美すべきものぢやとサ見て居た事であつたが 此梅の花のなんともかとも言ひやうもなく、いつまでみてもあかない色や香の眞面目は 折取つて親しく見たうへで知られる事であつたわい、といふので 「あはれとぞみし」と強くいひ切つて「梅の花」とよびする さて「折りてなりけり」と軽く結んだかけ合せがいかにも妙である

梅の花を折りて人におくりける、

とものり

君ならで誰にか見せむうめの花色をも香をもしる人ぞしる
君でなくて 外に又誰に見せる人がありませうぞや 此梅の花の色と云

ひ又香と云ひ 之を知る人で始めて賞翫する事であるから、といふので 知らぬ人に見せては、とんとなんの詮もない、それ故折取つて君に見せる事であるといふを言外にしらせたのぢや

くらぶ山にてよめる、

つらゆき

梅のはなにほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有り
ける

「倉部山」は山城國の名所、それを暗き意にあやなして、闇にこゆとうけたのぢや、○梅の花の香が高くかをり匂ふ春先は くらぶ山と云ふ名の如く 至て暗い間の夜に越えてゆけども 梅が咲いてをるといふ事は 能く知られる事である、

月夜に梅の花を折りてと人のいひければ、をるとてよめる、

みつね

「をりてとは折りてくれよとの意を含めたのぢや、

月夜にはそれとも見えす梅の花香をたづねてぞあるべかりける

影すこくすみ渡る月夜には、どれが梅の花ぢややら差別が立たぬから、句ひくる香を手引として、その方に尋ねよりて、枝をば折るの外はない、と云ふので、「香をたづねては薫る處を尋ねてといふではない、薫を手引として、梅の花を知るといふ意で、月夜に花の色のみえぬといふ事を面白くいひまはしたのである

春の夜うめの花をよめる、

春のよのやみはあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるし
「あやなし」といふ詞は古來諸説が多い事ぢやが、いづれも當を得ぬ遠鏡にわけのたぬものぢやと譯せられたが、稍近いけれど猶十分とも思はれぬ正義に之を非として「かひなし」の意としたが、それも叶はぬ、これは俗に「ラチモナイ」といふ詞がよく叶ふあやな、あやなく、あやなきなど古來歌に文に用ひた

もの管らちもないとして見ればよく叶うて聞える事ぢや、○春の夜の闇と云ふものはらちもないものぢや、なにさま闇であるからに梅の花の色こそは見えないけれど、さればとて其香までをかくしをほすか、香は隠しをほせぬ、といふので、さてくらちもないものぢや、と言外にくりかへす意がしられる。

初せにまうづるごとにやどりける人の家に、ひさしくやどらで、ほどへてのちだいたりければ、かの家のあるじ、かくさだかになむやどりはある、といひ出して侍りければ、そこにたてりける梅の花を折りてよめる、

初瀬は大和城上郡泊瀬ぢや、「やどりける人の家」は坊中又は途中などで、いつも宿泊した家をいふ、「かくさだかになんやどりはある」は、此の如く儘に宿泊せらるゝ事かとの意で、今能く道も忘れず來られた、といふ程の詞、「いひ出し」は人を以て言はしめたのぢや。

人はいさ心もしらず、故郷ははなぞむかしの香にはひける

いさのさは清みてよむいさは知らぬといふ意をあらはす聲古來不知の字を當てよませてある誘ふ意のいざとは別である○そこもとはいやさ：心が變つたか變らないかまらぬが この故里の梅の花はサやはり昔のやうにすこしもかはらんで 香氣高く匂うてをる事ぢやわいと云ふので かく定かに云々と主人が言ひ出したるに應じて 其事は言はず却つて主人の心がはりの有無はまらぬが 花ばかりはと云ひなしたが面白いのぢや花を昔の云々と強くいふたうちに、おのづと人は昔通りではありさうもないといふほどの心がまられる 倍又此歌の故郷といふ詞は以前毎々宿つた家をさしていふのぢや 又此歌は詞書の通り梅の花に添へた事だから梅とは云はないのである。

水のほとりに梅の花のさけりけるをよめる 伊勢 春ごとにながるゝ川を花とみてをられぬ水に袖やぬれなむ

毎春々々 流れてゆく此川の水にうつる梅の花の影を 眞の花と見ちがへては いつもく折る事もできない水に 空しく袖をぬらさうとする事よといふので さてくばからしい事であるといふを言外にしらせたのぢや 川を花とみては川にうつる影を花と見ての意であるが詞を省いても語勢でさやうに聞えるが妙である。

年を経て花のかどみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらむ

年々歳々花の影をうつすを年をへて花の鏡となるといひ倍鏡は年を経ればくもるものぢやから散りかゝるを塵のかゝるによせてくもるとうけたのぢや○年々歳々 年を重ねて花の鏡となつてをる水は 花の其水面へちりかゝるは 即ち年を重ねた鏡の面へ塵のかゝるもので 之をくもるといふべきであらうかと云ふで 此二首は梅の花を實地についてよんだものであるから花とばかりで梅と云はぬぢやそれ故詞書で梅とことわつたのである 家にありける梅の花のちりけるをよめる、つらゆき

くるとあくともめがれぬものを梅の花いつのひとまにうつろひぬらん

「めがれは目離れで離れる事を古くはかる」と云ふ「さ離る」「在處離る」「遠ざ離る」の類ぢや、「ひとまは人間ぢやが至つて軽く用ひなれてすき」と云ふ位の詞ぢや○日がくれるとては見夜があげたとは見常に賞玩して目が離れると云ふ事はない事なるものを梅の花よいつどの時のすぎにかやうにちり始めた事であらうとあやしみ云ふので、常に之を大切に守護してをる事なるにいつのすぎにと云ふやうなるさまによみなしたか面白いのぢや、さてうつろふとはうつるといふと同じくすべてこれが彼にうつり變るに云ふ故に色のこの色からかの色に變るにも云ひ又散りて枝より離るゝにもいふのである。

寛平の御とき、ささいの宮の歌合のうた よみ人しらず

梅がゝを袖にうつしてとまめば春はすぐともかたみならまし

「とまめてばは留めたらば」と云ふ事、これを留めたらばぢやといふは語學にうとい説で、それでは五句の「ならまし」とも打あはぬ事となる。○あゝ賞玩すべき梅の花の薫ぢや、此薫を十分袖にうつし句はせて留めて置いたらば、春はよしや暮れて過ぎゆくとてもいつまでも花の形見は残る事であらう、といふので、さらばうつしといめおかんと、の意を言外としたのぢや。

そせいほふし

散とみてあるべきものを梅の花うたてにはひの袖にとまれる。

「うたて」といふ詞は古來色々といふ説が多いが、一口にいうてよくはまる譯語がまだないが、これは今いふ「ケシカラズ」又「ケシカラヌ」といふ語がよくあたる。武烈紀に奇偉といふ字を訓ませ、菅家萬葉に、別様の字をあてたも、此意からぢや、委くは別にいうてある、こゝも「ケシカラズ」の意ぢや○ちるさうぢやと只一通りに見てをるべき事であつたものを、あの梅の花よ、なまじひに近寄て惜んだが爲にけしからず句が袖に留つて思ひ出す種となつた事ぢや、といふので、あるべきものを「うたて」云々とのかけ合せて、愁ひに近寄て惜みし爲

といふ意がしられるのぢや。

題しらず、

讀人しらず

ちりぬとも香をだに残せ梅の花戀しき時のおもひでにせむ

ちるとならばせひもないが、よしやちつてしまふとも香をばかりでも残しておけよ梅の花よ 後日戀しいと思ふときにはその香を思ひ出しぐさとせやうものを、

人の家にうゑたりける櫻の花さきはじめたりけるを見てよめる

貫

之

此歌からして、春下の貫之が「水なき空に浪ぞ立ちける」迄は皆櫻をよんだものぢや。故に歌に櫻と云ふ事がないものには詞書に櫻と書いてある。其うち春上には盛の程までを云ひ、春下には散方をよんだものををさめたのである。又平城天皇の御歌より貫之の「深山がくれの歌迄は萬の花をよんだものぢや。故に詞書にも櫻とはない。」

今年より春しりそむるさくら花散るてふ事はならはざらなむ

「春しりそむるは、櫻は花を賞玩するものであるから花が始めてさき初めるをかく云うたである。○今年からして始めて春と云ふ事を知つて花が咲きはじめたる櫻よ さやうに始めて春を知る事ならば、まだちるといふ事も知らぬ事であらうからに、散ると云ふ事はすべての花のまねをせぬやうにありたい事ぢや」と云ふて、何分か祝の意をふくめたものぢや

題しらず、

よみ人しらず

山高み人もすさめぬ櫻花いたくなわびそ我見はやさむ

「すさめぬは賞翫せぬと云ふ事、いたくなわびそは甚しく迷惑に思ふなどの意ぢや。○山が高く、人が行きて賞翫する事もない場所にさく櫻花よ、甚しく迷惑がり、侘しがなるな、此方が十分に見榮し珍重すべき事であるから」と云ふので、「みはやさん」は見榮さんで珍重し賞美する事、人も来てみぬ深山の櫻がうるはしく咲いたをみて花を情のあるものとしてよんだものぢや、

山ざくら我見にくれば春霞岑にもをにもたちかくしつゝ

岑は山の高い處を云ひ 尾は山の末の長く引いた處を云ふ すべてをば長く引いたるものを云ふ事 芋 緒 又は鳥獸の尾の類ををと云ふで知るべきである。○山櫻をわしが折角と見に来れば いちわろくあれあの春霞が岑即ち山の高い處にも 又尾即ち山の末の長く引いた處にも どこにもかしこにもたちかくしたちかくしする事よといふで ア、にくらしい霞ぢや、といふを言外に示した 「たちかくしつゝの句わがみにくればの句と相應じて言外の意を生ずる處が面白いのぢや

染どのゝきさきのおまへに花がめにさくらの花をさゝせた
まへるを見てよめる、 さきのおほきおほいまうち君

染殿の后明子は文徳天皇の后さきのおほきおほいまうち君は前大政大臣といふことで藤原良房公の事染殿後の御父ぢや

〇 年経ればよはひは老いぬしかはあれど花をしみれば物思ひも

なし

私は年を多く取つた事でありませすれば 年齢はいかにも老いました しながらかやうにうるはしい結構なる花をサ見ますれば なんにも外に思ふ事はありません、というで 何もかも皆忘れて楽しくよろこばしく思ひ升と云ふを言外に示したのぢや 後の宮の御有様のいかにも盛にうるはしく、結構にまします事を花にたとへ さてそれを見奉るうれしさをのべた事である。

なぎさのゐんにて櫻を見てよめる 在原業平朝臣

渚院は河内の國交野郡にある御殿で惟喬親王が度々御出であつた所である 其時業平も親王の御供で参つて此歌もよんだのぢや、

〇 世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

此世上に於て、一向に櫻の花といふがないことで有つたならば 春に當つて人の心持は さぞゆつたりと長閑な事であらうのに、といふので 言外に

るに此花があるが爲に心が頻りにうかれ立つて、こゝかしこの花見の
 あわたせしく氣せはしなく暮らす事かな、といふ情を含めたのちや、まか
 し櫻の花といふものは、咲くを待ち散るを惜み、又は雨を厭ひ風を恐れなど
 心を盡すものなれば、かやうに言ふと説くはあまりに入立ち過ぎた説ちや
 詞書に洛の院の櫻を見てともあつて、畢竟こゝかしこに花盛を見やうとする
 から、いそがはしく氣せはしないと見るべきで、之を愛する情の甚しいから
 して、反て寧其無きを願ふにまで至るといふのが面白いのちや、さて又序
 に御話し申しておくが、此歌の五の句のまじといふを、俗にまじと濁りてよ
 んで、世上に櫻の花がなかつたならば、春の心は長閑であるまいといふ事と
 思ふは大きな誤で、第一まじといふならば、のどけかるまじといはねば叶は
 ず、からまじとはいはれぬ詞つかひちや、殊に又櫻がなかつたなら、春の心
 が長閑であるまいといふのでは、平凡な趣向で、何の面白みも興もなく、言は
 ずともこの事である、其の花故に春は長閑におもはるゝともいふべき櫻が、な
 い事ならば長閑であらうと反對にいふのが面白いところである

題しらず

よみ人しらず

いはゞしる瀧なくもがな櫻花たをりてもこむ見ぬ人のため

これは谷川の向ふに花のうるはしく咲いたのを見て、よんだものちや、「いは
 いしるは岩の間をはげしく流れてゆくをいふ、瀧はたぎり流るゝ水の事即
 ちこゝでは川水の事ぢや、○岩間をたぎり流れてゆく荒瀬の川がなければよ
 いに、さらばあれあの向ふの方に、うるはしく咲いてをる櫻の花を、折取て
 みやげにしやうものを、こんなよい花を見ない人にはなしをして示すため
 に、といふので、「たをりてもこむ見ぬ人のためは來んものをと深く思ひ入つ
 たもので、見ぬ人のためとうけて、其櫻のいかにも面白く見て過ぎかたきを
 いふのちや、上に瀧なくもがな」というて、借かくうけたので、其組合せから
 さやうに聞えるのちや、

山のさくらをみてよめる、

素性法師

見てのみや人にかたらむ櫻花手ごとに折りて家づとにせむ

「見てのみや」のやは反語で、やはの意、即ち見てのみやは人に語るべき見てのみでは語られずとの意。「家づとはみやげ」と云ふ事、〇あゝ美事な事ぢや、これを見たばかりではどうして人に語られやうぞ、決して語られはせぬ、あれあの櫻花をば、いざ手ん手に枝を折取て、それをみやげとして、花をみせて、此けしきを語る事と、此やう。」

花ざかりにみやこをみやりてよめる、

見わたせば柳さくらをこきませせて都ぞはるのにしきなりける

「こきませはしこきて交せ合する事で、こゝでは先づはかきませるといふ程の意に用ひたのぢや、〇此の山の上からかう遙かに見渡してながめれば、柳の青い色に、櫻のうすあかい色を、ごつちやにかきませ合せて、とんと京はサ、春の錦といふべきさまであるわい、というて、あゝ美事の事ぢや、といふを言外に示したのぢや。」

さくらの花のもとにて、としの老いぬるをなげきてよめる、

紀のともものり

色も香もむかしながらにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

「さくらめどさくあんばいぢや、やけれどいふに、櫻をかけて云うたものぢや、〇櫻の花は色といひ、香といひ、年々同じく昔のまゝに咲くあんばいぢや、けれども、年取つた人はサ、年々歳々にやうすがちがつてゆく事ぢや、わい、といふので、花のやうならばよからうものをといふ意を、除情としたのぢや、をれる櫻をよめる、

貫之

「をれる」は折ありあるにて、折取つてある事ぢや、

誰しかもとめて折りつる春がすみ立かくすらむ山の櫻を

「とめては、求め尋ねてといふ意の詞ぢや、〇誰がサ、マア、求め尋ねて往つて折つて来た事ぞ、春霞が一般に立かくして、どこに花があるやら、とんとわかるまい、山の櫻花をば」といふので、「誰しかもとめて」とつよくいうて、「立かくす

らむ山やまとうけたかけ合せあはせから どこにあるやらわかるまい花はなをといふ意いが、
おのづとまられる ころが味あじふべきところぢや。

歌たてまつれとおほせられし時ときよみて奉ほうる、

○ 櫻花さくら咲さきにけらしも足引あしひきの山やまのかひよりみゆる白雲しらくも

「足引あしひきのは山やまと云ふにかゝる枕詞まくらことばかひは間で山やまと山やまと重かさなり合あうた間の事ことぢ
や、○あゝ櫻花さくらが咲さいたらしい事ことよマア あのだくみゆる山やまと山やまと重かさなり合あう
た間に 雲くものやうに白しろく見みえるのは、と云ふので さらくとよみ下くだして、た
いありのまゝにいうた歌うたではあるが 一吟いんの下もといかにも其景そのけいを見みるやうな
氣きもちがして、まことにすぐれた歌うたである 「これは櫻花さくら咲さにけらしも」といひ
下くだし之これをうけてあし引あしひきの枕詞まくらことばをおいて調しらべをのどめ さて山やまの「というたか
け合せから 「足引あしひきの」とのどめた處ところに、ほのく」と霞かすみんだ遠山とほやまを遙はるかに見渡みわたした
やうなさまが、何なにとなく含まれて聞きえるので こゝが枕詞まくらことばの妙うまいである 枕詞まくらことば
といふと一口ひとくちに調しらべをのどめるものといふが 調しらべをのどめるとばかりでは實じつ
はわからない 調しらべがのどめられるからかういふいひ盡つくされない味あじが生うずる

よしの山やま「さひのくまひのくまひのくま川がはの類るいもこれと同じ味あじのある事ことぢや、と
いふは、前の「春霞はるかすみたゝるやいつこの歌うたに照てらしてもわかることぢや 然しかるに
一句いっく足たらないから枕詞まくらことばを持もつて來きてうめ草くさにするものゝやうに思おもふは、大間違おほまちがひ
ぢや 尤もつと古歌ふるうたぢやとて枕詞まくらことばは必かならずかやうな味あじがあるものぢやとは申まをされな
い、中なかにはうめ草くさに似にたものもないではないが 老おかし先まづ概おほしてはかうい
ふやうな妙うまいがあるもので これで枕詞まくらことばの大様たいやうはわかりましたらう ぢやが、
長歌ながうたでの枕詞まくらことばは又一種いっしゆの情じやうがある、それは又長歌ながうたでお話はなし申まをすであらう、さて二
の句く六帖むくしやく顯昭けんせう本等ほんとうにはけらしな」とあり なといふも、もといふも、共に歎辭たげことばで、
どちらでもよい、やかましくいふ程ほどの事ことではない

寛平かんへいの御時ごとき、きさいの宮みやの歌合うたあひのうた、 とものり

みよし野のの山やまべに咲さる櫻花さくら雪ゆきかとのみぞあやまたれける

吉野よしのの山やまの邊あた一面いっぺんに咲さきみちてをる櫻さくらの花はなは ふとみると雪ゆきがふつて、つも
つたのかとばかりまちがへられる事ことよ」といふので 吉野山よしのやまは常に雪ゆきが降り

つもる山で 雪の積つてあるさまは平常見なれてをるからしてかやうにい
うたので 櫻が山に咲きみちてをるさまがおのづとしられる歌ぢや。

やよひにうるふ月有ける年よみける、 伊 勢

櫻花春くはゝれる今年だに人の心にあかれやはせぬ

「春加はれるは閏年をいふ」あかれやはせぬはあかれはせぬと云ふ事で、即ち
何故あかれずして早くちる事ぞと咎めかけた詞ぢや、○櫻の花よ 平年はと
に角せめては閏月のある今年ばかりでも 見る人の心に十分と思ふ程に、ゆ
つくりと咲いたがよいのに 何故あかれずしてさやうに早くちる事ぞ、とい
ふので むごい事ではないか、といふを言外にしたのである。

櫻の花のさかりに、ひさしくとはざりける人の來たりける時

よみ人しらず

あだなりと名にこそたてれ櫻花年にまれなる人も待ちけり

「あだはうつり易く、かはり易い事に云ふ、〇うつり易く、かはり易いものぢや、と

名高く立てこそはをれども櫻花は決してあだではない はてサ一年の内に
來るといふ事は極めて少ないお方をも かやうに待ち受けた事であるから、
といふので 是は男女の間で、近來男の來る事が疎くなつたのが 櫻の花の
時分、ふと來たるについて、よんだものだらう、と正義にいへる説がよるしい
詞書のさまから歌の様子も 朋友間の事とは聞えぬ 伊勢物語に 男女の
の事として此歌をのせてあるが これもあながち作りなしたでもあるま

かへし なりひらの朝臣

けふこずばあすは雪とぞふりなましきえずばありとも花とみ
ましや

いやサ丁度今日わしが來合せたから此花にも、であふた事ぢや もし今日こ
すして明日となる事ならば 此花は雪の如くふり亂れて、散てしまふ事であ
らう 左様あらばたとへ消えうせずしてありとても もはや花とみる事が

出来やうぞやといふので 歌の表ではかやうにいうて借裏の意は 今日来ればこそ、兎にも角にも是まで通りで面會もせらるれど もし明日とならば、忽ち他人のものとならん さらばたとへ此家にありとも 是迄通りの人とみる事が出来やうぞやといふたのである 「あだなりと名にこそ」のかけ歌に對して、尙ほ其あだなる事にいひなしたのである

だいしらず

よみ人しらず

ちりぬればこふれどあるしなきものをけふこそ櫻をらばをりてめ

「あるしなきは詮がないといふこと」「をらば折りてめは折るなら折るがよいといふこと 死なば死ね 散らば散れ などすべてかやうに重ねて云ふ詞は其事はもと厭ふ事ぢやけれど、其時に臨んで之を許す時に用ふる詞ぢや死ぬは厭ふ事なれど、死ぬなら死ぬがよいといふぢや、今もそれと同じで櫻を折るは常は甚厭ふ事なれども、今は折なら折がよいと許すのぢや、これを

折れといふ意ぢやといふ説はよくない。〇散てまふた上では 何程見なく戀しく思ふとても詮がないものを、今までは之を愛するから折などの事は思の外の事としたが、今日こそ此櫻を折るなら折るが宜しい」といふので、明日はすでに散つてしまふのであらうから、といふを餘情としたのぢや、さて此歌三の句にものをとおき、四の句けふこそさくらとせまつた語勢で、借五句折らば折りてめと受けた組合せから、おのづとは是迄は深く愛して折るなどの事は思ひもよらざりしかどといふ意、及び明日とならば散るべければ、といふ意などが言外に含まれて聞えるのぢや、こゝが歌のおもしろいところぢや

む 折とらばをしげにもあるか 櫻花いざやどかりて散るまでは見

をしげにもあるかはをしいやうに思はれるナアといふことでは歎息哉の意ぢや、〇あゝ美しい花ぢや、どうも見捨てゝは行かれぬ、といふて折り取つて行くも亦惜しい氣持がするナア、此櫻花よ、あゝ何とせうサアそれなら、

いつそここの所に宿を借りて、花の散てまふまひ見ることよせやうといふので、折とらば云々いざやどかりて云々といふので、おのつと家の花でないといふ事、又花のいかにもうつくしい事があられる

紀のありとも

櫻色に衣はふかく染めてきん花のちりなむ後のかたみに

櫻色といふは櫻重の色といふではない、又櫻色とて一種の色あるでもない、只櫻の花のやうな色といふ事ちやと遠鏡にみえてをる、○櫻の花のやうな色に、衣服をば十分に染めておくことよせやう、程なく花はちるであらうから、其時の紀念のためにサといふので、後のかたみにといふ言外に、そのかたみに依てせめて心を慰めんとする意がみえるのちや

櫻の花のさけりけるを見にまうできたりける人によみておくりける、

我宿の花見がてらにくる人はちりなむ後ぞこひしかるべき

わしの家を、花見兼帯で問ひ来る人をば、花が散て寂くなつた時分には、さそ戀しく思ふ事であらうといふので、まかし其時分にはいか程戀しく思ふとも訪ひ来る人はあるまい、根がわしを訪ふではなく、花故にくる人であるから、といふをがてらといふ辭及びくる人はのはのてにをばで餘情にまらせたもので、表はさらさら人と人がらよくついで、借裏にいひ盡されぬ感慨を含めた歌である

ていじらむの歌合の時よめる、

伊

勢

見る人もなき山ざとのさくら花ほかの散りなむ後ぞさかまし
見に来る人がない山家の櫻花は咲いても張合がない事ちや、よそ外の花が散てしまつてから、其のあとでさくべき事ちやの、「といふので、さらばわざ／＼見にくる人もあるべきものを」といふ意を餘情に示したのちや

古今和歌集卷第二

春歌下

題しらず

春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく

よみ人しらず

うつろふはうつろといふを延べていふ詞ですべての物が此を離れて彼處へ
代るにいふものじや 家にいひ 色にいひ 心にいふも皆此を離れて彼に
代り變ずる事ぢや 花にいふももと木を離れて地に落る事で散るをいふ
又色のさめるも此を離れて彼色に代り變ずるものぢやからこれをもうつる
といふのであるが此歌にいふうつろふは散る事をいふのである 此詞の事
は前にも大略申したが更に御話し申すのであるさて此歌はうらくと霞ん
だ日に遠山ざくらを遙かに見渡してよんだもので、○あれあのやうに春霞が
ほんのり棚引いてをる山の櫻花が、もはや散り方が近づいた故でもあらうか、
今日見れば大分色がかはつて來た事であるといふので、言外にかねて花を惜

む情があふれ、しかも調がいかにものどかで、之を吟ずれば何となく目のあたり其景色を見るやうに思はれる。こゝが風調の妙である。さて又此春の下には此歌を第一において次からは落花の歌をのせられたのちや。まてといふに散らでしとまるものならば何をさくらにおもひまさまし

「ちらでしとまるのしは例の強めの辭で、〇ちらんとする花に向うて待て、ちるなど言はん、それを聞入れて散らなくてサ留つて居る事であるならば、何物が櫻よりも立増つたものであると思ふべきぞ、實に世上に櫻の上に立つものはあるまいをといふので、櫻はすべての花の中で第一のものなれども、只ちりやすいが缺點であるといふことを餘情に示したもののちや

残りなくちるぞめでたき櫻花ありて世の中はてのうければ

めでたきは、愛痛きといふとで、愛する事の甚しいちや、〇櫻の花は一時に忽ち残らず散てしまふといふが最も愛すべく賞すべき所である。一體此世の中

といふものは、すべて永くある時は終には必ずよい事はない、うい事があるものちやからといふので、ちるぞめでたきと強くいひするた語勢が櫻のちりやすいを人は缺點とすれど決してさうでないといふ情が言外にあらはれ。又「ありてよの中はてのうければ」となめたところに謂ゆる命長ければ耻多しといふ諺もおもひ合されて、まことに面白い歌である。大丈夫須玉碎不可瓦全の意をうるはしき詞のうちにいひ盡したもののちや

このさとに旅ねあぬべし櫻花ちりのまがひに家路わすれて、

「ちりのまがひは櫻のちりみだれるまぎれ、といふ事、この歌は他所の櫻の盛んに散るを見てよんだもので、〇あゝ目も惑ふ程に盛にちる事哉、これでは今夜は此里に旅やどりすることゝなるであらうよ、櫻の花がかう目もちらつくまで惑はしくちりかふまぎれに家に歸る道をも全く忘れ切つてしまつてさ」といふので、散るさまがおもしろくて歸路も忘れるを、ちりのまがひにといひなしたである

うつせみの世にも似たるか花櫻さくと見しまにかつ散にけり

うつせみの、は、世、人、いのち、などにかゝる枕詞で顯しき身といふより出でた詞
 ぢや。こゝは枕詞ながらやがて實詞のやうに用ひたものぢや。似たるかの
 かはかなの意の歎詞で、問懸のかではない。かつは物の兩端にわたる時おく
 辭かつ笑ひ、かつ泣く、かつおそれ、かつよろこぶの類で一方をいふ、こゝは咲く
 といふに對して一方はこゝあゝ花よ、櫻よ、とんとマア此生身のからだの人間
 の世とよく似てをる事であること哉、大分立派に咲いたと見るか見ぬ程には、
 や一方は散てしまふたわいといふので一吟した處で生者必滅といふ情が思
 ひしられて感の深い歌ぢや

僧正遍昭によりておくりける、

これたかのみこ

惟喬親王は文徳天皇第一の皇子で、御出家なされては算延とおいひなさつて、
 雲林院に御住みなされた。此雲林院は此前に遍昭が住せられた寺である。
 歌に古さと人とおるは遍昭をいふのぢやから此歌は雲林院に御住居の時分
 のであらうと申す

櫻花ちらば散らなんちらずとてふるさと人の來ても見なくに

ふるさと人は、前にいふ通り遍昭はもと雲林院に住した人であるからそれを
 さしていふのぢや、〇おもしろく咲たりし櫻の花も、もはやほとくちりさう
 になつたが、よし／＼ちるなら散つてしまふがよい、散らないとて、我が
 今日まで待つて居た昔馴染の人が來てみるでもないの、といふので、咲い
 たより今日迄來てみるだらう、と心まちに待ちたるさまを言外に示し、さて
 これを御おくりなされて、かやうに思うてをるといふ事をおしらせなされ
 たである

雲林院にて櫻の花の散りけるをみてよめる、承均法師

さくら散る花のところは春ながら雪ぞふりつゝ、さえがてにす
 る

此歌については、先づ詞書にある雲林院の事を一通り御話し申さねばなら
 ぬ。此雲林院と申すは、もと淳和天皇の離宮で雲林亭と申したのを、後に常康
 親王に賜はり、親王より更に遍昭に御譲になつて前に申した通り遍昭が住

した事で 紫野から舟岡へかけて、廣大な庭園で 池もあり、中島も有て、数千株の花林目もはるく、と並立ちたる處であつた由である。さて左様に廣い庭園で、数千株の櫻のちるさまを見てよんだもので、○數限りもない櫻の花の散る場所は、時節は長閑な春ではあるけれども、雪が一面にふりつゝして、しかも積つて消えかぬ事である、といふので、さて、怪しい事よ、といふを言外にしたのぢや、めもはるく、と廣い庭園に、花が一面ちり亂れ、じろく、とつもつたさまは、いかに雪中のやうなけしきであらうと思はれる。櫻の花の散けるを見てよめる、

そせい法師

花ちらす風のやどりは誰かしる我にをしへよゆきてうらみむやどりは住處といふ程の事ぢや、○あつたら花をかやうにちらす風の住處はどこであらう、誰ぞ知つて居るであらう、我に教へて呉れよ、そこへ往て思ふさまに恨を言つてやらうものを、と花を惜むあまりに、あどけなくよんだのである。

うりんるんにて櫻の花をよめる、
ぞうぐほふし

○ いざ櫻我もちりなむひとさかりありなばひとにうきめ見えなむ

これは此よみ人が身の上について、何が感ずる所が有つて、花によせて其感ずるのべたもので、いづれにも僧官とか、又は寺職とかをやめて、退かうとする時の歌と見える。「散りなむは散らう」といふ事で、身分の方では退かうといふ事、「ありなばはこゝでは有つた上ではといふ意ぢや、○さあ櫻の花よ我等も汝と一緒に散つてしまはう、即ち此位置を退いてしまはうぞ、今日かやうに花盛のやうに、賑はしく暮してをつた上は、此後世間の人から、愛くいやな仕向を受ける事もあらうから、といふので、左様の事のないうちに、といふを言外にしたのぢや、儲正義に、此よみ人を由性であらうというて、由性が雲林院の勾當を辭職せんとする時の詠ちやといひ、三代實録や紀畧の文を引いて、細かに論せられたは、至極面白い説ちやが、何にしてもかやうによみ人がぞうぐとあるからは、承均の歌として説く外はないことである。

あひまれりける人のまうで來て、かへりにけるのちよみて花

にさしてつかはしける。

貫

之

六二

相知るといふ事は、男女の間の事にもいふが、こゝはそれではない、普通の知りあひといふ事ぢや。又花にさすと、花につけるとは、差別がある。花にさすは紙をぐるぐる巻いたをいはへて、それを枝にさすぢや。花につけるは、其いはへた紐のあまりを枝へ結びつけるぢや。是は歌には關係がないが、序にお話し申しおくのぢや。

ひとめみし君もやくるとさくら花今日は待みてちらば散らなむ

「君もやくるとは君がもしも来る事があらうか、といふ事〇かねてちよつと一目見かけた君が、もし又来てみる事もあらうかと。櫻花よ 今日一日は試みに散らで待て居て、さて後に散るなら散るがよい、といふので、これをおくつてやるので、今一度今日にも来てみよといふ意を、言外としたのぢや。山のさくらを見てよめる、

春霞何かくすらんさくら花ちるまをだにも見るべきものを

あの霞は何故さやうに立ちかくす事であらう。あの山の櫻の花、惜むかひもなくちる事ぢやが、せめてその散る間丈でさへも詠め見るべき事であるのに、といふので、借もうらめしい霞である、といふを言外にきかせたのぢや。又ちるまをだにも、話勢に、惜むかひなく散る事故といふ程の意がおのづこもつて聞えるのぢや。

こゝちそこなひてわづらひける時に、風にあたらじとておろしこめて待ゆはるあひだに、折れる櫻の散がたになれりけるを見てよめる
藤原のよるかのあそむ

「こゝちそこなひては、気分をそかねてといふ事。風にあたらじとは、冷えてはならぬとてとの事。おろしこめては、几帳面の類をおろしこめた事で、今いふ部屋をたてこめる事ぢや。折れる櫻は、折て瓶にさしてたいた櫻といふ事。散がたに云々は、熱がさめず、こし気分が快くなつて、気がついてみれば、いつの

まにやらちりがたになつたといふのぢや
たれこめて春のゆくへもしらぬまに待ちしさくらもうつろひ
にけり

風にあたるまいとて簾几帳の類をおろしこめ、即ちたてこめて、月日の過ぎゆくも夢中でくらしした間に、咲いたならば見やうものをと楽しんで待て居た櫻の花も、いつかはや色があせて散りさうになつたわい、といふので、さてく、残念の事よ、といふ意を餘情に示したのぢや、「春のゆくへ」は月日の過行くといふほどの意で、春のゆくへもしらぬまにの句中、おのづと病にふして、何事もまらざつたといふ意がこもつて聞えるのぢや

とう宮の雅院にて櫻の花のみかは水にちりて流れけるを見
てよめる、
すがの、高世

雅院は東宮の御儀式又は宴會などを行はれる場所ぢや、御溝水は御殿の軒下通りを流れてゆく溝の水の事

枝よりもあだに散にし花なれば落ちても水のあわとこそなれ

「あだはこゝでは、もろくはかない意に用ひたのぢや、〇元來其咲いた技からも、もろくはかなく散つてしまつた櫻花ぢやからして、散つての後もあれあのやうに、水の泡となるであらうわい」

さくらの花の散りけるをよめる
つらゆき

ことならばさかずやはあらぬさくら花見る我さへにしづ心なし

「ことならば」といふ詞には、色々の解釋がある、其おもなるものをいはい、同じことならば、こんな事ならば、此の如ならば、期とならばの類であるが、古き歌文の上について考へるに、いづれもよくはまらない、これは今言ふ「イツソノコトニ」といふ意の詞で、古くことならばとある詞を、いつそのことに、といふにかへてみると、始めて意味がよくわかる、此事は別に古き例をあげて、くはしく言うておいた、咲かずやはあらぬは咲かないでをればよいにな

六六
せ咲かすにはをらぬといふ事「まづ心なしは心が落つかずわさくするこ
とぢや、〇いつそのとに、一向咲かないでをればよいになせ咲かすにはをらぬ
事ぞ 櫻花よ 此やうに譯もなくちるからして 見る此方までが心が落付
かずわさくしてたまらぬことぢやといふので 上下の句の間に花のちる
ことをふくめたので それ故詞書に斷つたのぢや 「みる我さへに」とあるさ
へ 〇の辭に目を注いでみるのぢや 花の盛にちるさまは實にせはしく落ちつ
かぬやうなものぢやがそれをやがて惜む心にうつして言ふた所が味ふべき
である

〇
櫻のごとくちるものはなしと、人のいひければよめる、
さくら花とくちりぬともおもほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ
いやく櫻の花は早くちるものぢやとはわしは考へない (といふは櫻は風
を待つてちるものぢやが人の心といふものは 風の吹くをもまたないで、い
つのまにやら變じてしまうものであるから)といふので 上の句をおもほえ
すにて切て、さて人の心ぞと強くいふかけ合せから、といふは櫻は風を待ち
るものぢやがといふ意、おのづと生ずるのぢや。

〇
さくらの花のちるをよめる、 紀のともものり

〇
ひさかたの光のどけき春の日にあづこゝろなく花のちるらむ
八方のは天又は空といふにかゝる枕詞である それを此歌では直に空とい
ふことに用ひたのぢや、ひかりは光景でけしきといふ意、〇空のけしきがい
にもうらゝかでのどかでゆつたりとした此春の日であるのに 何故あのや
うに落つき心もなく氣せはしなく櫻の花はちる事であらう、といふので 上
の句を春の日にといひすゑて、さて下の句にまづ心なくといふかけ合せから、
おのづと何故にといふかる意を生ずるのぢや、この格古歌に多く見えます
春宮のたちはきのびんにて、櫻の花のちるをよめる、

藤原のよしかぜ

帯刀は春宮の警護の士で禁中では瀧口といひ、院では北面といふ、いづれも警
衛の侍の事である 陣は其詰所ぢや

春風は花のあたりをよぎて吹け心づからやうつろふとみむ

「よぎては除け避けることこゝろづからは心自で今いふ心がらといふことぢや、〇あゝ春風よ、たとひ吹くとても櫻花の近邊をば除け避けて吹くやうにせよ、さらば櫻のちるをば、其心からでちるものぢやと思ふべきであるから」といふので、風のために散ると思へば甚残念に思ふから、といふ意を言外にしたものである

櫻のちるをよめる、

九河内躬恒

雪とのみふるだにあるをさくら花いかにちれとか風のふくら

天然自然に散るでさへも、とんと雪の降るやうにをやみのないものを、あの櫻の花よ、尚ほ其上にどうちれと言ふことで此風は吹くことであらうといふので、さてもく、なさけない風ぢや、といふを言外にしたのである

日枝にのぼりて、かへりまうで来てよめる、つらゆき

日枝は近江の比叡山の事ぢや

山たかみみつゝ我がこしさくら花風は心にまかすべらなり

山が高くて行く事ができないから、遠くより望みくして此方は過ぎて来たつたものを、あの櫻の花よ、さほどに高い場所なるにも拘はらず空ふく風は心に任せて、ちらさうと思へば何時でもちらすだらうと思はれる、といふので、さてさて妬ましい事ぢや、といふ意をふくめたのぢや。「山高みみつゝわがこしの句におのづと、山が高くて登ることが叶はず、遙かにみつゝ、ゆくさまがしられる、さて又わがこし櫻花と、かゝり、風はとうけた、かけ合せで、さほど高い場所ぢやけれども、といふ意が自然と生ず、こゝがおもしろいのぢや

題しらず、

大友くろぬし

春さめのふるはなみだか櫻花ちるを、しまぬ人しなれば

人しなればのしは例の強めの辭で、〇此節春雨がかやうに降るは、是は世

間の人の涙が集つてかやうに雨となる事であるか といふものは櫻の花の
散る事を誰でも彼でも一人として惜まない人が少ない事であるから、といふ
ので 大げさにおもしろくいひまはした歌ぢや

亭子院の歌合のうた、

つらゆき

○ 櫻花ちりぬる風のなごりには水なき空になみぞ立ける

「なごり」といふ詞は波殘といふ事から起つたもので 何によらず其物が去つ
て、其の餘勢が尙ほ殘つてあるものをいふ詞ぢや、○櫻の花が風にさらはれて、
散つた餘勢に 風にちらされた花はしばらく空中に騒いで居て 水もあり
もせぬ空中に、とんと波が立つやうに見える事ぢや

奈良のみかどの御うた、

ふるさととなりにならぬ都にも色はかはらず花はさきけり

「ふるさと」といふに、二つの別がある 舊都といふと 故郷といふとぢや
と舊都をいふからおこつて、故郷をいふ事となつたのぢや ころは舊都を

いふのである、○舊い都となつて何事も變りはて、衰へはてしまふた此奈良
の京にも 以前に少しも色のかはるといふ事なく 花ばかりはうるはしく
咲いた事であるわい、といふので 「色はかはらず」といふので其他は萬事萬物
ことごとく變りたりといふ事が言外に知られるぢや、さて前にも申した通り、
これより以下は櫻ではない、すべての花の歌をあげられたものである

○ 春のうたとてよめる、

よしみねのむねさだ

○ 花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめはるの山風

「ぬすむはさきに知られぬやうに、そつとそれを奪ひさる事だ、○あのかしこに
咲いてをる花の色をば 霞が大事にして人に見せまいと立こめて隠して居
るから、詮方もないが せめては其薫ばかりでも、偷んでこゝにもち来て、此方
に傳へよ 春の山風よ、と花を見んとして霞むを歎じたものぢや

寛平の御時後の宮の歌合のうた、

そせい法師

花の木も今はほりうるじ春たてばうつろふ色に人ならひけり

花咲く木をも是からは掘て来て植ゑるといふ事はもはやせまい (是までは好んでうつしうるた事ぢやけれどといふは 春が立て花が咲く頃となれば花のうつり易く、變じ易い色に、人の心もならうて、あだしくなるものであるわいといふので、それゆゑといふを言外としたのぢや、木もといひ、今はといふ間に、おのづと今までは好みてうるたれどといふ意がみえるのぢや、
だいしらず、
よみびとしらず、
春の色のいたりいたらぬ里はあらしさけるさかざるはなのみ
ゆらむ

春の景色は一般に行渡りて、こゝには至つたが、かしこには至らぬといふやうな事はあるまい (然るにどうしたものか) 花は咲いたのもあり、又咲かぬのもみえるのであらう、といふので、さて、あやしむべきぢやといふを言外としたぢや、上の句に「里はあらし」と強くいひするて、さて下の句に「さける云々」といふかけ合せの上に、「然るに何故か」といふやうな疑の意を生ずるの

で、これが古歌の一格である。

春のうたとてよめる、 つらゆき

三輪山をゑかかもかくすか春霞人にゑられぬ花やさくらむ

三輪山は大和にある山の名ぢや、「まかもは、さやうにもマアと歎ずるので、甚しく霞むを歎ずるのぢや、〇あの三輪山をさやうにもマア甚しく立こめた事かな、春霞よ (さて) つよい霞ではある、あゝあの霞の中には、人に知れないうるはしい花が、澤山咲いてをることであらう、といふので、まかもかくすか春霞といふた語勢に、あゝつよい霞ぢやと歎じた意がおのづとみえるのぢや、
うりむゐんのみこのもとに、花みに北山のほとりにまかれりける時よめる。

雲林院の皇子は常康親王を申す、北山は平野社の北ぢや、さて古本及び一本にみこのもとにあるよし正義にみえてをる、それが宜しい、常康親王の御供で北山に花見に往たのぢや、

いざげふは春の山べにまじりなむくれなばなげの花の陰かは
 なげは無氣より出た詞なれど 轉用の上から等閑といふ程の意に用ふると
 申す「まじるはあるきめぐる事」こゝではこゝかしこ愉快にめぐりあるくに
 いふのちや、○さあ今日は終日春の山の中にあるきめぐりて面白くくらすべ
 きである たとひ日がくれても 等閑の花の陰であるか決して左様でない
 結構な花の陰がある(そこに宿つて花を賞翫すべきである)といふで「なげ
 の花の陰かは」等閑の花陰ならずとの事で即ち其陰に宿らんとこの意を言外
 にしたものちや。

春の歌とてよめる、

いつまでか野べにこゝろのあくがれむ花しちらすばちよも經ぬべし

花しのしは例の強めの辭○いつを限りとしてわしが心は春の野邊にうかれ
 て毎日々々出かけて日をくらす事であらう(これも花が咲いてをるからの事

であるから花がサ散らなかつたなら 千年もかやうにうかれて過ぐす事であ
 らう)上下の句の間に、これも花故なればといふ意がおのづと含まれるのであ
 る

だいしらず、

よみ人しらず

春ごとに花のさかりは有なめどあひみむことは命なりけり

「ありなめどはあるであらうなれど、いふこと」命なりけりは命にある事ぢ
 やわいといふので、即ち命の上にあるといふことちや、○年年歳々いつの春で
 もかやうな花の盛はある事であらうなれども ちかし其花盛に出であうて
 かやうに賞翫してみるといふ事は 實に命の上にあることちやわいといふ
 ので、明日が日にも死ぬる事ならもはや復び見る事は叶ふまい、との意を言外
 にしたのちや

花のごと世の常ならばすぐしてし昔は又もかへり來なまし

「世の常とは今年散れば、又來年咲き、年年歳々同じきをいふ ○人間の世も花

のさいたりあつたりするやうに、年々歳々同じさまで有た事であるならば、過去りたる昔も花が春毎に咲くと同じで、復び又かへりくる事であらうに、いふので、どうも人はさうはゆかぬ、といふを言外としたのぢや

吹かぜにあつらへつくるものならば此ひととはよぎよといはまし

あつらへつくるは、詠付くるで、つくと清みてよむぢや、注文しやること、よぎよは除け避けよとの事ぢや、○空吹く風に注文してやる事が叶ふ事なら、我最も愛して居る此一本即ち一株の花丈は、除け避けて吹散らす事をするな、といふべきであるを、いふので、さうできぬからせんかたがないとの意を、含めたのぢや

まつ人もこぬものゆゑに鶯の鳴きつる花を折りてけるかな

「ものゆゑに」といふ辭は、古來色の説があるが、いづれも十分でない、これは、ものであるのといふ意の辭である、委しくは皇國文法釋義に例をあげていう

ておいた○みせうと思つて待てをつた人も來ぬものであるのに、鶯がないていかにも惜しさうにした花の枝を、なさけなくも折つた事であつた、といふで、こんな事なら折らすともの儘でおけばよかつた、といふ意をけるかなと歎じたうちに、えらせたのぢや、すべてけるかなといふは深く歎する意をこめていふものといふは前にも申した、まがるに近來はさまでの歎でもなくてける哉といふが多い、故にある人はける哉といはれる哉ける哉といふより外はなかりける哉とわる口をいうた事である。

寛平の御時きささきの宮の歌合のうた、藤原興風

さく花は千ぐさながらにあだなれどたれかは春をうらみはてたる

「ちぐさながらには千種いづれも皆がら」といふこと、○春咲く花は種々さまざまある事ぢやが、どの花もすべて皆あだにはかなくちり易いものぢやけれど、さすればとて誰一人か其爲に春をあだちやとて、恨み疎んだ者があるか、あ

る事はないといふので、言外に、さればあだといふものは却て人情に叶ふものかといふ意を含めたのぢや。

七八

春かすみいろの千ぐさに見えつるはたなびく山の花のかけか

色のちくさは色が種々さまざまといふ事、○あれあの春霞の色が、こく薄く種々さまざまに見えたのは、それが棚引き陰してをる山の中に咲いてをる種々さまざまの花の色が、霞に映じうつりて、さやうに見える事でもあらうか

在原のもとかた

霞たつ春の山邊は遠けれど吹くる風ははなの香ぞする。

霞の立てをる春の山を見渡せば、あれあのやうに遠方にみえることであるが、まかし吹いて来る風は花の薫がすることである、といふので、まてみれば格別遠いではない、霞んでをるから遠く見えるぢやらう、といふ意を言外に

しらせたのぢや

うつろへる花を見てよめる、

みつね

こゝにうつろへるといふは色の變るをいふのぢや、さてここに色の變る事の歌をあげて、次よりは散る事の歌をのせたのである。

花みればこゝろさへにぞうつりける色には出じ人もこそしれ

うつろへる花をみれば、惜しむからして我心までも花の上に移つてサ、まふ事ぢやわい、まかし此移つたといふ事をば、色には出すまい、あまり移り氣ぢやと人が考へるかもしらぬに依てさ。

だいしらず、

讀人しらず

鶯のなく野べごとに来てみればうつろふ花に風ぞ吹ける、

鶯が鳴いてをる野邊のそれくに来て見れば、どこの野にもどこの野にも散る花にサ、風が吹いてをるわいと、言ふので、春が深くて花のちらざる野もなく、鶯のなかな所もなきを、ちる花を惜みて鶯がなくやうによみなした

がおもしろいのぢや

八〇

ふく風を鳴きてうらみよ鶯は我やははなに手だにふれたる

これは花の近邊へ立寄た時などに 鶯があわたしくなくを聞いてよんだものぢやらうと正義にあるが宜しい。○花のちるは風がちらすのぢやからして吹く風をないて恨むがよい あの鶯よ 此方は花にちよつとでも手をふれた事があるか 決してないものをといふのぢや

典侍冷子朝臣

散るはなの鳴にしとまるものならば我鶯におとらましやは

此歌は花のちる時に鶯の鳴くをきいて それを花を惜むからなくものになしてよんだもので、○あゝあのやうに鶯がなくは 花を惜むからの事とみえるが もし散る花が鳴くといふ事でサといまる事であるならば わしも決して鶯に劣るものか いや鶯よりも立まさりて泣く事であらうといふので なれどもいかに泣くともとまらぬ故に泣かぬぢやといふを言外にした

のぢや

仁和の中將のみやすむどころの家に歌合せんとしける時

よみける。

藤原後蔭

花のちることやわびしき春霞立田のやまの鶯のこゑ

侘しはつまらなく味ないこと。○花のちるのがつまらなく味ない事に思ふからの事か あれあのやうに春霞がいかにものどかに立ちこめてをる立田の山に ものうげに鶯のなく聲がするのは、といふので 春霞のたつといふを立田といふにかけて、春の日のどかに霞がうらくとたちたるを思はせうぐひすに物うげになくことをかけたので調さらさらとして餘韻が深い歌ぢや

うぐひすのなくをよめる

そ せ い

木づたへばおのが羽風に散る花を誰におほせてこゝらなくら

む

「木傳ふは高くは飛ばないで、技のこゝかしこを、ひよこ〜とうつりとぶこと
 「おほせは全負で、それがしわざにかづけぬりつけるをいふ。こゝらは數多
 き事で、こゝではしば〜といふ程の事、まきりにの意に用ひたのぢや、〇鶯が
 枝うつりをして、木傳をすれば、自身の羽たゝきの風で、花がちるのを、他の
 仕業でちるかのやうに、誰にかづけぬりつけて、恨めしさうに頻に鳴く事ぢ
 やろう、といふので、さて〜わけの分らぬ鳥である、といふを言外としたの
 ぢや、歌に鶯といふ詞がないから、詞書に断つたのである。

うぐひすの花の木にて鳴をよめる、
 みる つ ね

あるしなきねをもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに
 「まゐるしなきは詮のないといふこと、〇ア、あの鶯は、詮のないなき方をもちする
 事であるなあ、（これは花の散るを惜むからの事と思はれるが、今年に限つて、
 花がちるといふ譯ではない、年々歳々いつも同じやうに散るものぢやのに、
 といふので、ことしのみちる花ならなくにと強くいひするた處から、年々歳
 々云々の意がおのづと生ずるぢや

だいいしらず
 よみひとしらず

駒なべていざ見にゆかむ古郷は雪とのみこそ花はちるらめ

「駒なべては駒を並べて、即ち馬を乗り列ねてぢや、「ふるさと」は、これも舊都
 をいふのぢや、〇これかれ誘ひ合せ、馬を乗り列ねて、さア見にゆかうぞ、我
 等がもと住んで居た故郷の京は、今時分丁度雪のふるかとみる程に、花が盛
 に散て居る事であらうからに、故郷の春のさまを落花について思ひやるさま
 調なだらかで感が深い歌ぢや

散花を何かうらみむ世中に我身もともにあらむものは

散る花をばかり何としてあだぢや、はかないなどいうて恨むべき事であらう
 ぞや、此世の中といふものは、實にはかないもので、此方の身といへども、い
 つまでかうして存命してをるべきものであらうぞ、といふので、此ちる花と
 同じやうにやがて死んでゆくものぢや、故に花ばかり惜しむべきではないと
 いふを言外にしらせたのぢや

小野小町

○ 花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

此歌は自身の身の上を花によそへてよんだものぢやからして先よそへた詞を説いてさて歌の意をお話し申さう「花の色はうつるは色が變るにいふので即ち容色が衰へるぢや」「いたづらは無用空しくぢや」「我身よにふるは世に立ちて交際し月日を渡る事、經るを雨の降るにかけたのである、「ながめは長目で物を考へる時は其物を見るときなくちつと物の見つめられる者で、それを長目といふ、それから轉じて眺望の事にもいふこと、なつたのぢや」さて此長目を長雨にかけたのぢや、○一首の表の意は「咲いた花の色はいつか早くうつり變じた事よなあ、別に賞翫する事もなくむだに空しく毎日降る續く此長雨に、我身が花見に出るといふ事もならず引籠つて居た程に」といふので、さて裏の意はあゝ我が容色も、いつか早く衰へ變じてまゐつた事

よなあ、むだに空しく我身の世に立つ上について、それを心配して居た間、此の間の間に仁和の仲將のみやすむじころの家、歌合せんとしけることによめる。

をしと思ふ心は糸によられなむちる花ごとくにぬきてとどめむ花を惜しいと思ふ此方の心は、どうぞ糸により合せるやうにしたいものである、さうしたなら散らうとする花を一つ一つに其糸で維ぎ通して、枝にとめておかうぞものを、といふので、ぢやがさういかぬからせんかたがないといふを言外としたのぢや

志賀の山ごえに女のおほくあへりけるに、よみてつかはしける。
つらゆき

志賀の山ごえは京からして近江へ行く道ぢや

梓弓はるの山べをこえくれば道もさりあへず花ぞ散りける

「梓弓は春といふにかゝる枕詞」「さりあへずは避けよける事ができぬほどに
 といふことぢや、○志賀の山を此方が越えて来れば 道をよけ避ける事も叶
 はぬ程に 花がサ、澤山散つて来る事ぢやわい」といふので 女を花に見立て
 、「よんだのぢや 女の衣裳を着飾つたは、實に花ともいふべきであるからぢ
 や 志賀の山は古く櫻が多く有たところで それ故志賀の山越といへば、ち
 りしく花をふみ分けてゆくといふ程にまでいひならしたものである。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた、

春の野に若菜つまむとこしものをちりかふ花に道はまどひぬ

ちりかふは、散交ふで、ちり亂れる事ぢや、○今日は春の野で若菜をつまんがた
 めと家を出て来たものを 折しも花のちる眞盛でちりみだれる花に、気がほ
 んやりとして、若菜はさておき 道もわからなく、家路もとんと忘れてしまふ
 た

山寺にまうでたりけるによめる、

やどりして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞちりける

旅宿を取つて 春の山ざとに寝た晩には 花に對して居るでない夢の中に
 も やはり晝みだやうに花がサ盛にちりみだれる事であるわい、「といふので
 終日をしんでみだからして、夢にまで花の散るをみるであらうとの事を、餘
 情としたのぢや

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた、

吹風とたにの水としなかりせばみ山がくれの花をみましや

水としのしは、例の強めの辭「見ましやは見んや、いやみる事はあらしといふ
 事 吹きちらして溪流の上に誘ふ風と、又其花をうかべて、流れくる溪水とが
 サ、ないで有つたなら 深山の奥に咲いて 人里に遠い所の花をみる事がで
 きやうや いやみる事は出来まい、「といふので 花をちらす風と、花をさそひ
 流す水とを反對によるこんだものぢや さて此歌までが廣い花の歌で 次
 からは藤山吹の類の歌ぢや

志賀よりかへりくるをみなどもの花山に入て藤の花のもとに立よりて、かへりけるによみておくりける。

僧 正 遍 昭

よそにみてかへらん人に藤の花はひまつはれよとかむまをだ

「よそにみては志賀寺參詣序に來たのでわざ／＼來つたでないこと 五句普通本には枝はをるともとあれども六帖にかむまをだに」とあるかたまさる由先哲がいはれたは至極の説で今もそれに從ふのちや○幸便に鳥渡立よつてすぐ又かへらうとする人に 藤の花よ 藤はひまつろふものであるから此人々にはひまつはりつけよ さうしたらば入々がそれをとかんとする程だけでも見るべき事であるべければといふので 「とかむまをだに」といひさしたるところが餘情にておもしろいのである

家にぶぢの花のさきけるを人のたちとまりて見けるをよめ

る。

み つ ね

我宿に咲ける藤なみ立かへり過ぎがてにのみ人のみるらむ

「ふちなみは藤藤より出づ藤は藤くものなればとの説ちや さてなみといふより浪にかけて立かへりなどもいふので こゝの立かへりといふも振りかへりみる事に浪をかけていふのである。○何の見るかひもないわしの家の藤の花ぢやのに 何としてあのやうにふりかへり／＼して見すて、過ぎかねるやうにして 人のみる事であらうといふので さて／＼あやしいこと、いふを言外にしたのちや、過がてにのみと、強くかゝつた語勢に、おのづと何故といふ程の詞がこもつて、さて人のみるらんと疑つたのである さて前にみえてをるわがやどの花みがてらの歌といひ 此歌といひ 人情の輕薄をそしつたものぢやけれど 少しもかどくしくなく、あはれに情あつく聞ゆるが妙ぢや。

題しらす、

よみびとしらす

今もかも咲にほふらん橋のこじまがさきのやまぶきののはな

橋の小島が崎は大和の飛鳥の橋の島といふところで万葉には多くみえて居る。○ア、今日此頃は定めて盛りに咲句うてをる事であらう。あの橋の小島が崎の山吹の花は「いふので何の事もない歌ぢやが之を吟ずると何となく年々わが賞翫せし花といふやうな情」及びあゝゆきて見たいものぢやとおもふさまなどが言外に溢れて聞える。こゝが調の妙なところである

春雨ににほへる色もあかなくに香さへなつかし山ぶきの花

これは雨中の山吹を詠んだもので句ふといふ詞は今専ら鼻に感ずる上ばかりにいふが古くは目にも耳にもすべてほんのりとする感にいふ詞ぢや色の匂、聲の匂の類である。こゝにいふも雨にぬれて色のほんのりとする事ぢや、○春雨にぬれてほんのりとした色は又一層で何ほみてもく飽かない事であるのに其香氣までさへ雨故に一しほまさつてなつかしくかざる山吹の花よ

山吹はあやななさきそ花みむと植ゑけむ君がこよひこなくに

これは男が前方植ゑておいた山吹が咲はじめたを見て其時丁度男が來ない時故女のよんだもので戀歌である。あやななはかねて申した通り、らちもなぐといふ意。○山吹の花はらちもなくやたらにさいてはならぬぞ花をみやうというて折角と植ゑておきなされたあのお方が今夜は來もなさらぬものだのに「いふのですべて此なく」といふ詞づかひは其事を強くいひするて心を深く重くする辭である。

よしの河のほとりに山吹のさけりけるをよめる。

貫之

吉野川岸の山吹ふくかぜに底のかげさへうつろひにけり

吉野川の岸通りに咲いてをる山吹は吹く風に散る事であるが水の中へは風は吹入るまいのに水底にうつりてをる影の花さへそれと同時にうつろひちつたわいといふのでさてくあやしいといふを言外にしたのぢや花が散れば影もちるは當然の事なるを水中には風も吹くまじきに底

の影さへうつろひたりとをさなくいふたところがおもしろいのぢや。

題しらず、よみ人しらず

かはづなくゐでの山吹散りにけり花の盛にあはましものを

此歌はある人のいはく、たちはなのきよともが歌なり、

井出の里は山城の國相樂郡の地名で謂ゆる蛙の名所ぢや。○かはづで名の高い井出の里に、その蛙のなく時節に来てみれば、山吹の花はもはや散つてしまつた事ぢやわい。あゝ残念な事であつた。此花の盛に来てみたならよかつたものを。さらくともよみ下したのみで、別にこれといふ事もないが、さて空しく蛙の聲のみをきいて、山吹のちりはてたるをうらんださまが、目のあたりにみえるやうぢや。

春のうたとてよめる、そせい

おもふどち春の山べに打むれてそこともいはぬ旅ねしてゐるか

「そこともいはぬは共場所とさし定めぬこと」旅寐してしかのかはがなと願

ふ意のかで旅寐がしたいものであるとの意ぢやと古來の説ではあるが、一首の調がどうもさうは聞取られない。もし果してさうならば、花鳥の色音が、おもひ春山であるからといふが主意になるから、春の山べに旅寐してしが、といはなくてはならず、又時候も盛春頃の事を未然からいふ者ぢやから、順序も春上の春日野の若菜つみにやとある前後になく、は叶はぬ事ぢやのに、こゝは前に山吹の散りたる歌をのせ、次よりは暮春の歌がつけてのせてある。かたぐ、これは旅寝去てし哉と其山遊びの面白かりし事を、後から思ひ出して歎息した歌である。○氣の合うた友達が、春の山の邊に大勢で、銘々心のまゝに遊んで、どことさし定めたところもなく、行き暮れたところへ宿を取つて遊んだ事があつたがな、といふので、まことに面白くて忘れられないといふを言外としたのである。かやうに過去のしにかなのかを連ねていふは、こそその結ばかりではない。忠見集に「春雨はふりそめにしかうつたへに」詞花集「昨日かもあられふりしかまがらきのなど其外例が多くあることぢや。

春のとくすぐるをよめる、

み つ ね

九四

梓弓はるたちしより年月のいるがごとくもおもほゆる哉

梓弓あづまゆりは例たとのはるにかゝる枕詞まくらことばであるが、此枕詞このまくらことばにあやなして射いるが如ごとくといふたが面白おもしろいである。○梓弓あづまゆりはるといふが實じつに其春そのはるが立たつた日ひからして、今日けふかやうに春はるが暮くれてゆくまでの間あひだを思おもふてみれば、月日つきひの早はやいことは、丁度ちやうど射いるやうに思おもはれるである事ことかなア。此歌拾遺集このうたじゆいしゆ及び六帖むくしやく家集けしゆ等らには、いづれも歳暮さいぼの歌うたとしてあるが、今こゝでは詞書ことばがきを加へて、暮春ぼしゆんの歌うたとしたのである。

やよひにうぐひすのこゑの、久しう聞えざりけるをよめる。

貫 之

鳴とむる花しなければ鶯も果はものうくなりぬべらなり

散ちるを惜おしんで鳴なくけれど、鳴なきとめた花はながサない事ことぢやから、然しかも、とうぐままひには鳴なくもいやになつたらしうみえるわい、といふで、それぢやから

なかねだらう、といふを言外げんがいにしたのである。

やよひのつごもりがたに山をこえけるに、やまがはより花のながれけるをよめる。 ふ か や ぶ

花ちれる水のまにくくとめくれば山には春もなくなりにけり

花はなが散ちつて流ながれて來きる水みづを便たよりとして、それに添そひ随したがつて尋たづね求もとめ來きてみれば、水上みづうへの山やまには、花はなはもはや一向いかうなく、春はるはすでになくなつてままうたわい、といふで、青葉あおはまげりて、全く夏景色なつげしきとなつた、といふを言外げんがいとしたのぢや

春をくしみてよめる、 も と か た

をしめどもとゞまらなくにはるがすみかへる道にしたちぬと思へば

「たちぬ」といふに霞かすみの立たつと、旅路たびぢにいでたつとをかねたである。○暮くれて行く春はるを惜おしんでやる事ことと思おもふけれど、止とまらないから、いかんとも詮方せんかたがない、あれあのやうに春霞はるかすみが、すでに歸かへる道みちの空そらにサ立たつた事ことであるから、といふ

ので、「といまらなくに」といひするて、おもへばとうけたかけ合せからいかんとも詮方がない、といふ餘意を生ずるのぢや

寛平の御時后の宮のうたあはせの歌、たきかせ

聲たえずなげや鶯一とせに二たびとだに來べき春かは

これは鶯のまばくなくをきいてよんだ歌のさまぢや 一説には前にみえ
たやうに鶯の久しくなかぬからよんだものだらうともいふが調の上がどう
もさうは聞えない、○さうぢや、聲の絶間なくせつせと鳴くがよい 鶯よ
今日暮れて行た上は、一年の内に又二度と來たるべき春であるか、決して二
度とは來ぬ春ぢや、といふので、さらば今が鳴時ぢや、随分せつせとなくがよ
い、といふを言外にしたのぢや。

やはひのつごもりの日、花つみよりかへりける女どもを見て
はめる。 みづね

「つごもり」とは月末を大かたにいひ、つごもりの日とは晦日一日の事をいふの

ぢや、花摘とは野山に出で、花を摘み來り、佛に奉り、又先祖の墓などにも手
向くる由、先哲いひおかれた、

とむべき物とはなしにはかなくも、ちる花ごとにとたぐふこゝろか

此歌は落花によせて、女共の事をよんだもので、即ち表は落花をいうて、裏
に女共の事をいふのぢや、「はかなく」はこの歌では、甲斐なく、詮ない事にいふ、
○散る花には、心を寄せたぐへたとて、止め得らるべきものではないに、甲
斐なく、詮もなく、其ちる花の一つ／＼に心がきつう附隨せられる事よ、といふ
を、表で、さて女に心を寄せたぐへたとて、止め得らるべきでないのに、詮も
なく、其一人／＼に心が附隨せられる事よ、といふを裏としたのぢや。

やよひのつごもりの日、雨のふりけるに、藤の花を折りて人に
つかはしける 業平朝臣

ぬれつゝぞあひて折りつる年の内に春はいくかもあらじと思

へば

此雨にぬれつゝまながらサ遮つて此藤の花は折つて進上いたし舛わいと申すものは此一年の間に日数は尙澤山あれどまかし春の日数は幾日もあるではあり舛まいと思ひ舛からの事であるからといふので春は唯今日一日丈の事であるからといふを言外にしらせたのでかやうにいひ回したのが面白いところぢや此歌については古來色々説がある事ぢやがうけがたいが多い今は主として遠鏡に依てお話し申すのぢや

ていじゐんの歌合に春のはてのうた、みつね

けふのみとはるをおもはぬ時だにもたつことやすき花の陰か

今日一日ばかりぢやと春を思ふでない即ちまだ春の日数は多くあると思ふ時でさへもホイそれといふやうにわけ造作もなく立去る事が出来る花の下蔭であらうかい中々容易に立たれない事であるといふので然るに春

は唯今日一日とせりつめたこの花の蔭であるものといふを餘情としたのである。

古今集詳解春下卷之二終

明治三十七年三月二十日印刷
明治三十七年三月廿五日發行

古今集詳解卷一奥附

定價金卅六錢

著作者

中 邨 秋 香

東京市本郷區駒込四片町十番地

發行者

前 川 亦 三 郎

東京市日本橋區箱屋町十六番地

印刷者

三 島 宇 一 郎

東京市神田區表神保町二番地

印刷所

弘 文 堂

同所 電話本局二三一六番



發行所

東京日本橋區箱屋町十六番地

前川文榮閣

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生新著

古今集詳解

全卷一古今集序 定價卅六錢
卷二夏、秋、上、下、冬 定價 錢
卷三
卷四
冊四 近刊

本書は國文界の泰斗中邨秋香先生が多年の研鑽になりたる大著にして詞に顯れたる一首の心、詞の組合せ、風調、語勢に依て生ずる餘情等を詳細懇切に説き分け、一首の妙處を示したる、古人未發、未曾有の解釋、一讀忽ち歌の秘訣を悟るべく、而も講義筆記體總振かな付にせられたれば、國歌國文の初學者研究者は勿論、我國文學の花を味はんとする者は是非一讀すべき良書なり。

發兌元

東京日本橋區箱屋町

前川文榮閣

軍國の大活書

●高橋五郎先生新著

新刊 戦争哲学

菊大判全一冊
定價金四拾錢
郵税六錢

戦争や小は民人の禍福、大は一國の存亡に關す、暗中飛躍程危険なるは無し、幸に世戦争哲学なる者あり、著者即ち國家社會上より宗教道德上より、人道上、美術上、哲學上軍事上より推究し、東西古今の哲論を會萃折衷し以て此天下の最大事に千古の大鐵案を下せり、朝野官民の必讀は勿論出て戦ふ者、居て守る者共に戦争の哲理を常に胸裏に藏するを要す、立論の新警目を醒すに足る也、

發兌元

東京日本橋區箱屋町

前川文榮閣

◎高橋五郎先生新著 (第六版)

最新一元哲學

菊大判二百餘頁
表裝頗高尚優美
定價金五拾錢
郵稅八錢

哲學は人生の花なり、一元哲學は哲學の終始也、本書は著者が該博の智識と、深邃の考慮とを以て、一元哲學を根底より、歴史的に、哲學的に、社會的に覈論し、附録として、黒岩君著『天人論』の一元主義を、無遠慮に評論して餘蘊なし、唯に、最近の哲學の景況を知り得べきのみならず、併せて又宇宙及び世界てふ大問題の縱論横議を與かり聞くを得ん、實に萬人の必讀の良書なり

◎普綠蔭先生校閱
◎渡邊竹蔭君 著

(總ふりがな付)

明治の家庭

洋裝全一冊
無類の美本
定價金廿五錢
郵稅四錢

いくら多くの富を重ねても、大なる名譽を負ふても、家庭が圓滿で無ければ其人は、最大不幸の人と言はねばならぬ、いくら學校教育が完備しても、家庭が不規則では、其子女は無用の者となつて了ふ、本書は我國現今の不完全、不規則極まれる、家庭を矯正せんが爲めに生れたので、已に家庭を作られた紳士や、奥さんは勿論、苟くも將來、理想の家庭を作らふと云ふ、青年淑女の、是非一讀せざる可からざる處の珍書であります、且本書の如き家庭書は、進歩したる新春の贈答品として、最も趣味のあるものと考へます、

◎高橋五郎先生新著 (第十一版)

人生觀

菊大判三百五十頁
表裝頗高尚優美
定價金五十錢
郵稅八錢

醉生夢死、飢ては食ひ、飽きては寢、寒くては着、暑くては脱ぐ、唯是のみならば、禽獸と何ぞ擇ばんや、苟くも人たれば、假にも萬物の靈と稱する人たれば、少なくとも如何んか是れ人生、人生とは何物ぞや位の疑問は之を蓄へざる可らず、寔に人は目を醒すや此疑問なきを得ず、さればこそ藤村操は華嚴の瀑に投身したれ、村岡美麻は牛込の古池に溺死したれ、實に人生觀は然か大切なると同時に又極めて健全なる者ならざる可らず、此書は即ち下等動物界より人間界を通觀し、大概括を此間に施し、遂に至健全なる安心立命的人生觀を打出し來れる者なり、苟くも人間の人間たるべき本分を知らんと欲する者は一讀せざるば有る可らずラセラヌ、カンデード、フアウスト、ハルトマン、加藤弘之、ビヒテル、ミル、スペンサル、ロチエ等の人生觀悉く此中に評論せらる。

何等の潤大、何等の偉觀

屈山 小室重弘先生新著

實驗雄辯學

菊大判全一冊
紙數百六十頁
定價金卅五錢
郵稅六錢

文明社會の戰は言論を武器として、輸贏を決せざるべからず、不辯舌は竟に社會競争の上に於て、劣敗者たるを免かれず、本書は著者が多年の實驗に基き、談論の秘訣、雄辯の妙用を講述せられたる者なれば、唯に雄辯術のみならず、亦文學にも創見する所少からず、故に實業家、教育家、宗教家、政治家、文學家、法律家、議論家、學生諸君の必讀すべきは勿論、苟も文明の國民たる者は、一本を座右に備へ、自己の運命を向上發展せられよ

高橋五郎先生著

訂正五版

世界三聖論

菊大判凡二百頁
印刷鮮明紙質特選
定價 金四拾錢
郵税 金六錢

三聖とは何ぞや、即ち東洋に大關係ある孔子釋迦基督なり、東洋の宗教及び道德は今や此等三聖の手中に在り(第一章)三聖の關係(第二章)三聖の人物(第三章)三聖の感化力等の如何を知るは將來の道德及び宗教を推斷するに最も緊切なる者とす、高橋五郎先生其富膽の知識と其犀利の筆鋒を以て縦横に之を論評せらる、壯快の文字深遠の思想三聖の眞面目をして紙上に躍如たらしむ、何れの倫理か今後人心を規正すべき、何れの宗教か將來天下を支配すべき、此大問題に解決を與ふる者は確かに此書なるべし

正岡藝陽君新著

最新刊

新時代の道德

洋裝無類美本
定價 金廿五錢
郵税 金四錢

久しく文壇に消息を絶ちし正岡藝陽氏、今や再び其極大の筆を揮て文界の中堅を突かんとす、新時代の道德一篇實に其宣戰布告也、氏の筆力世已に定評あり、然れども此篇の如く大膽にして思想の斬新なるもの氏に於て未曾有なると共に、又實に文壇の珍とすべきもの也本書の世評一斑
此書は著者の道德觀を有體に忌憚なく告白せしもの、即ち復讐主義を鼓吹し、偽愛國者を嘲り、蠻力の前には正義なく人道なしと喝破し、愛は到底虚偽なりと斷じ、人生須く其欲する處の欲を逞ふるにありと説き、古今の英雄滔々皆之れ大なる悪人なり彼等より惡を除けば彼等に稱すべく敬すべきなし、精神の自由之れ何物を得るよりも難し、弱肉強食は寧ろ生物自然の原理なるを以て人亦宜しく強者となりて弱者の肉を喰ふべしと結論す、此書恐くはニイチエ、ゴルキー邊より胚胎し來れるならんか、藝陽獨特の犀利の筆鋒肉を刺して骨に到るの概あり、此書の發行今少しく早かりせば彼の藤村操をして華嚴瀑下泡沫たらしめずして止みたるならん(横濱貿易新聞評)

哲學博士リー君原著
高橋五郎先生譯

訂正七版

人生哲學

菊大判二百四十頁
印刷鮮明紙質特選
定價 金五拾錢
郵税 金八錢

本書の原書は天下の諸新聞雜誌口を極めて之を賞揚讚歎し、萬國の學者一齊に之を以て近世の一大奇書と爲す、其今日の世界に有用適切なる者たるに非ずんば焉ぞ是の如くならんや、原書の文章に至りては實に光焰萬丈にして目ために眩まんとなす、其議論に至りては蘇國の博士「スタルリング」が評せし如く「哲學上科學上文學上の博識多識より五綏燦爛たる虹蜺を紙上に現出し來る」と謂つべく眞に是れ「アトランタ、コンスタチウシヨン」が評せし如く超群絶倫の綜合的人生哲學にして、學問と宗教此書に於て始めて琴瑟の和諧に達せりと云ふべし、其説く所は深遠なれども一般の讀者も亦讀で容易に解するを得ん、是れ著者の靈腕と譯者の精苦とを待て始めて成就せる大功業なり、大方の君子愛讀を給へ

久津見藤村先生著

訂正五版

家庭教育 子供のしつけ

洋裝清西點綴
定價 金貳拾五錢
郵税 金四錢

家庭教育不完全の聲漸く喧し、世上是が適切なる參考書を要求すること頗る急にして、其之を缺けるが爲めに、子女教育上大なる不便を感じつゝあるは、識者の常に遺憾となせる處なり
本書は是が缺點を補はんが爲め著者が該博の識と多年の實驗に依り幼稚時代、兒童時代、少年時代、青年時代の四段階に至る家庭教育の仕方を言文一致體にて十章百六十餘條に説き示されたる者なれば婦女子にても容易に理解せられ、直に實際に試むることを得べきやう記述せられたる近來稀に見るの好著なり

訂正再版

谷口賞華先生著 美術的
永井尚行先生譯 製本 全一冊 定價卅五錢（郵稅四錢）

和英對照
日本歴史
さくらばら

CHERRY BLOSSOMS
WEDDED TO ROSES.

本書は神武天皇東征より日英同盟に至る二千五百有餘年間の我歴史上顯著なるものを優秀精美なる和英兩文に對照して一は學生諸君の研鑽に供し一は卓大日本の光輝を發揚せる好著也。

文學士大町桂月先生著 東京日本橋區東中通 文祿堂 堀野書店 電話本局八十八番

筆の志づく

美術的 製本全二冊 定價四十錢（郵稅六錢）

桂月先生の才筆當代に超絶せることは今更説くを要せざる所し加ふるに才情人を刺し才思涌くが如し流麗なる美文と痛快なる論文と紀行なり史傳と錦心繪腸發して流麗なる美文と痛快なる論文と紀行なり史傳と

隨筆なり

韻文

書の味を解し給ふの士座右に一本を備へ給へ。

187
322